都名所圖會

前朱雀

291.6209
Ak
5

0349

都名所圖會

前朱雀

291.6209
Ak
5

都名所圖會巻之五目録

前朱雀

八幡疫神祭　神宮寺　放生川
常盤地藏　狐川流　宿院
阿弥陀堂　下高良社　鳩峯
石清水　上高良社　琴塔
細橋　新向橋　龍奉坊旧跡
志水　正法寺　女郎花塚
大荒木森　浮田森　淀川
城南社　秋の山　竹田
美福門院墓　西行寺　西行桜
冠石　碁盤梅　鐘木町　墨染寺
墨染桜　城山　桃の名所　梅谷　梅の名所
餌飼地藏　疫神堂　八幡宮　景清塚　御祭礼弔　放生会来由　淀姫社　水車　夜舟弔　北向不動院　安樂壽院　墨染寺　源氏物語旧跡

武庫川女子大学
平成 7.11.-7
4464861
図書
291.6209
Ak
5
喜多八重子氏寄贈

俠深寺　源艸　弱点
瑞光寺　元政墓
石峯寺　茶碗子
栗栖小野　即成就院
少將通路　小野
一言寺　下醍醐
長明方丈石　笠取山
京橋舵場　石田
樓川橋　豊後橋
三室戸寺　小幡
茶筋圖　宇治山
宇治橋　宇治川
朝日山　通象茶屋
　　惠心院

藤森社　走馬圖
昭宣公墳　宝塔寺
那須与一墳　桓武帝陵
小町水　栢の本
上醍醐　醍醐水
日野茅師堂　重衡塚
佛國寺　御香宮　沸香水
指月　六地藏
弥陀次郎旧跡　茨木山方福寺
喜撰嶽　宇治十帖古跡
山吹淵　橘小路橋
橋寺　離宮神
真聖寺　琴坂

亀石
槙の島
椹尾山
鎧掛松
鮎汲圖
鷲峯山金胎寺
兜社
玉川
蟹滿寺
一休和尚旧跡
狗墨
當麻
加茂社

山吹
橋姫社
平等院
扇芝
宇治田原
百丈山大福寺
玉水
井手里
蒲社
天神社
瓶原
海住山寺
清見河原

中宿芝
浮舟淵
鳳凰堂
駒麿松
黄栗焼栗林
久世鷺坂
諸兄公旧跡
光明山
北野神童寺
經喜邨
板社
茶仁邨
笠置寺

蛍狩
鵜飼淵
狛殿
縣社
信西入道墓
椎尾山
玉井寺
高倉宮霊廟
薪酬恩菴
木津川
國分寺
流圓
後醍醐帝皇居

栗栖天満宮

やうゝと彩りの下に
よい破魔弓毛鑓
ゑとの武者絵求
て土産ところハ祇坊
曽ゝ后三韓を退治
あるゝ御凱陣
はしくゝ人遺
風あるべし

石清水
流の
絶せぬ
大坂乃

八幡
神宮寺
科手
方丈
本殿
拝殿
表門
鳥居
田中善法院

八幡

御旅所疫神社

阿弥陀堂

新後撰

やくさゝ
さゝ
神の
めぐみ
そ

石清水八幡宮

帝釋天
梅尾社
御供所
大八幡
弁才天
阿弥陀堂
元三大師
経蔵
鳩山堂

乾向橋
武内臣
御本社
宝蔵
住吉
仁徳
若宮
琴
慈年坊
稲荷社
町

石清水正八幡宮八王城の南みて行程里綴喜郡男山鳩嶺に御鎮座あり

後鳥羽院

やはらぐるかぜにつれなき初しもの月に犯れ代と松風ぞ吹く

後久我内大臣

本社に三坐祭る譽田天皇　日本紀に足仲彦天皇又應神天皇とも是仲哀天皇

篇面の左子にして母は神功皇后と御坐位四十一年

聖壽一百　玉依姫　東の間に鎮坐します　鴉鷀草葺不合尊の妃　神功皇后　西の間に鎮坐

十一歳

開化天皇の曾孫氣長宿禰の女なり聰明睿智貌容美麗なり當帝廿二年に

三韓を平て筑紫に還り給ひて應神帝を生まれ玉位六十九年聖壽一百歳

當山に御鎮坐の貞觀二年六月十五日和別大安寺の沙門行教和尚神

殿を造營し奉り行教の祝詞に

一夏九旬の間系蓋して

盍を大京の經を讀誦して法樂せ奉る八幡宮御流宮あり

拭王城の近く遷坐して鳳闕を守護し國家を安泰ならしめんとの事なり

行教の二尊を阿弥陀の三尊現じ給ふ海門都に上りて此由を奏聞し

朝廷大に悅ぜ給ひ庵を此山に神殿を營て永崇敬しまつる

八幡の神號に筑紫宮濤駿松の下に八流の幡隆あり赤幡四流白幡四流則此所に

社を建て正八幡大菩薩と崇奉る又一説に和氣清麿に託して豐田八幡九

所を名付ぬ人あり當社を行教の勅使より兩部にして宮殿を御造營の塵と

同じくしまいあれど今幣使の御ことに唯一の神通にて法華經あり

とかう一鳥居　下宿院にあり八幡宮の額に佐理卿の筆なり旧板にて

れを補に

二鳥井　七曲の欄干　二鳥居　太師堂の前にあり石柱に銘を彫る正保二年正月從四位

下行信濃守大江姓永井氏尚政とあり建るとあり

若宮　仁德天皇　若姫宮　宇禮姫呉祀　水若宮　宇治の皇子なり

上高良　武内大臣なり多の古刹の花下に　下高良　藤大臣連保なる神號に高良

奉行しまつる故に石清水　本殿の巽の半腹にあり　玉命と号す

玉命と号す　傳に石清水權現社あり

松をおひみを苔むすとなほあり引き来しなくつるのまつりん　貫之

新拾

神のよりやうけを求るに清水をまちぞ出まそ久しき　為家

橘樹　社殿の前にあり　向橘　西の間廊の外にあり　楠　東間廊の外にあり　判官正成祈願のため勅撰載し

前にあり　橘の傳にあり行教和尚の身子　特尾社　本殿の西六町にあり

安宗別當社　安宗の靈祭なり　琴塔　毘沙門天を安置し軒の四方に　左右堂　上堂あり左右に

大塔　大日多宝の二塔なり　琴を掛て　大國玉命なり　南無佛の

像阿弥陀佛等なり　藥師堂　護國寺にて當社御鎮座以前の名刹なり　阿弥陀堂

安置　八幡宮社殿の詳なる事なし　風呂の詳なる事なし　大師の御祈願の君の殿　盛務院にて本尊なり

八幡宮社殿の元三大師堂　愛染堂　愛染堂　愛染明王なり安置

疫盡堂 一鳥居の南廊下の内にあり此所八幡宮御祓所之疫神祓は正月十九日
一日の勅請〻延喜式に曰山城と摂津の堺に疫神を祭りしとあり世人
正月十五日より十九日まで当山へ群参して其年の疫難を拂ふなり土民
将来の札月釘竹破魔弓毛鑓等を求めて家に収め邪鬼を退くるなり
本地堂 疫神堂の西に隣る極楽寺と称す本尊は阿弥陀仏脇士は観音
勢至を安置す此三尊は本殿の御正躰なり堂前の鐵燈臺は
豊臣秀頼公の御寄進なり
細橋 八幡住吉の二神影向ありし所なり石を布て橋の形とす
宮本坊 行教院と号す御山の内なり 伊勢を神宮遥拝所なり
瀧本坊 石清水の傍にあり松花堂惺々翁は
人にして書画をよくす今荒廃す 開山堂 昭乗の住房なり文禄慶長の頃の
僧正弾助建立 景清塚 本尊大師の像を安置す真言の隠
平家の侍士悪七兵衛景清主君の讎を報んとて此所
に忍びて将軍頼朝卿当山参詣を窺ひしとぞ
稲荷社 小鍛冶宗近此所に祈りて名剱を鍛しとなり
大乗院 宿院科手の向にあり当山の神宮寺なり本尊は千手観音を安置す
神殿を神功皇后に祀り愛染明王五方尊を安置す開基は
興聖菩薩なり
足立寺 本殿の西にあり昔称徳天皇弓削道鏡に帝位をゆつらんとし給ふ時
和氣清丸を勅使として宇佐八幡宮に祈りて神慮をきゝ給ふ
清丸上洛して其旨を奏す道鏡怒りて清丸の二つの足をきりて淀川に流す
のせて流す此舟宇佐の浜に着けるに猪来りて清丸を負ふて神殿に至る
社壇より五色の小蛇出て清丸が脛を舐るに二つ足もとのごとく生じけり清丸
帰洛の後男山に伽藍を建て弥勒仏を安置し足立寺と号す

三善法寺 当山の社務にして二ヶ寺あり善法寺新善法寺
田中善法寺等は何れも武内大臣の後胤にして紀氏なり 五常泉 石清水 ぬ井 薮井
赤井等は真所
図にあり
放生會は例歳八月十五日なり人皇四十四代元正天皇御宇養老四年
九月に征夷の事ありて大隅日向の両国の夷に逆乱を故に内裏より筑紫
宇佐八幡宮に御祈誓ありて其宮の禰宜辛嶋勝波豆米は神軍を引率し
てかの国を征しあまたの敵を亡しなり其後八幡の御託宣に此度あまた合戦に多
の殺生をなせる間殺生会を行ふべしとなり神勅ありしなれば諸国に放生会を
此時より始るなり 扶桑記によれば後三條院延久二年八月十五日より上卿六府の官
人を以て行はれ幸に准じて神輿に扈従しけるとなり 後冷泉院の御時よりとあり
放生川 八月十五日放生供養ありて高橋より魚鳥を放しける 安居橋といふ
新古今 放生川をいふなり
男山秋のなかばに契りおかん 潮みつるかたに 泉くまるゝ 家隆
臨時祭は三月中午日なり 天慶五年より始る
新勅
石清水すみしのまにまに
ちりもせし衣にかゝる竹のまえ人のかざしのさくらは 定家
餌飼地蔵 小野篁の作金昌寺の内にあり 若宮八幡 科手にあり
常盤地蔵 とき八幡の神職之 放生川へ餌をあたへて本尊とす

八幡社放生會之
毎年八月十五日の
未明より下院神
幸ありて日七ッ時
還幸あつて十六日
又ハ放生川の汀へ
社僧出て色々く
の魚鳥放ち
さまゝ山々谷々ハ
遠近より諸人
群集し

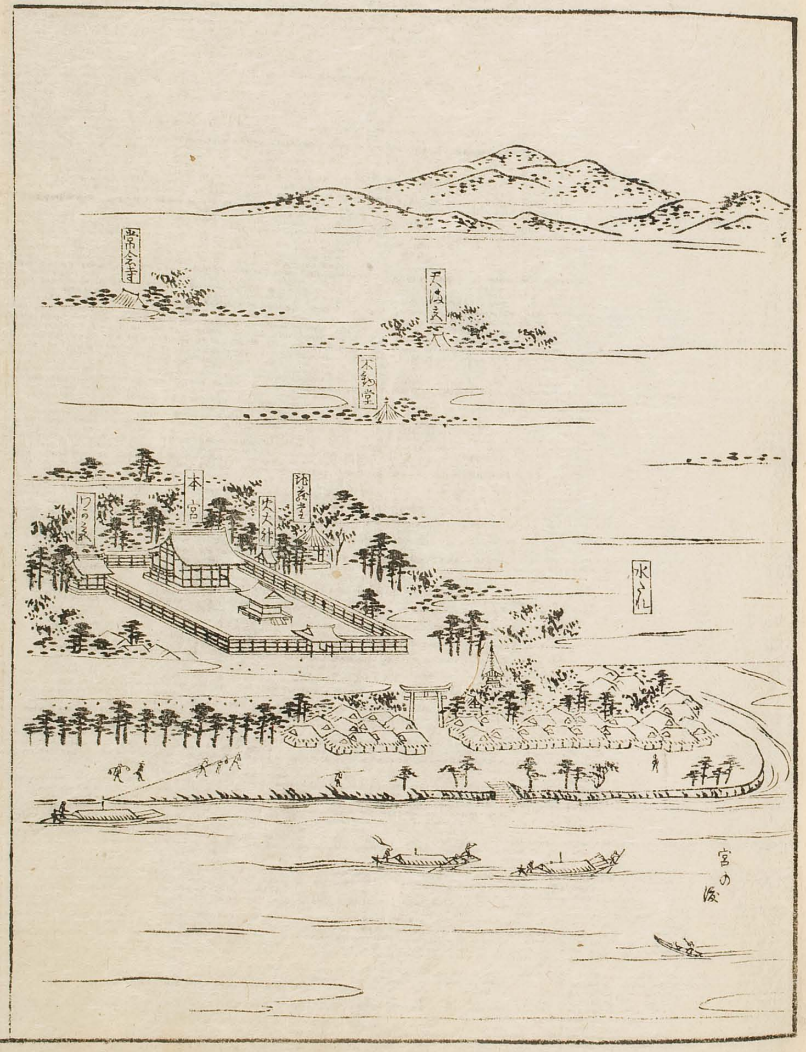
宿院のかとり
ふハせ居放下
師いろ〳〵乃
あそび出て大地
をく市をるにハ
神恵のめぐみ
うるべし

山門
方丈
本堂
鐘ヶ岬
此所ハ
みなもと川
あり

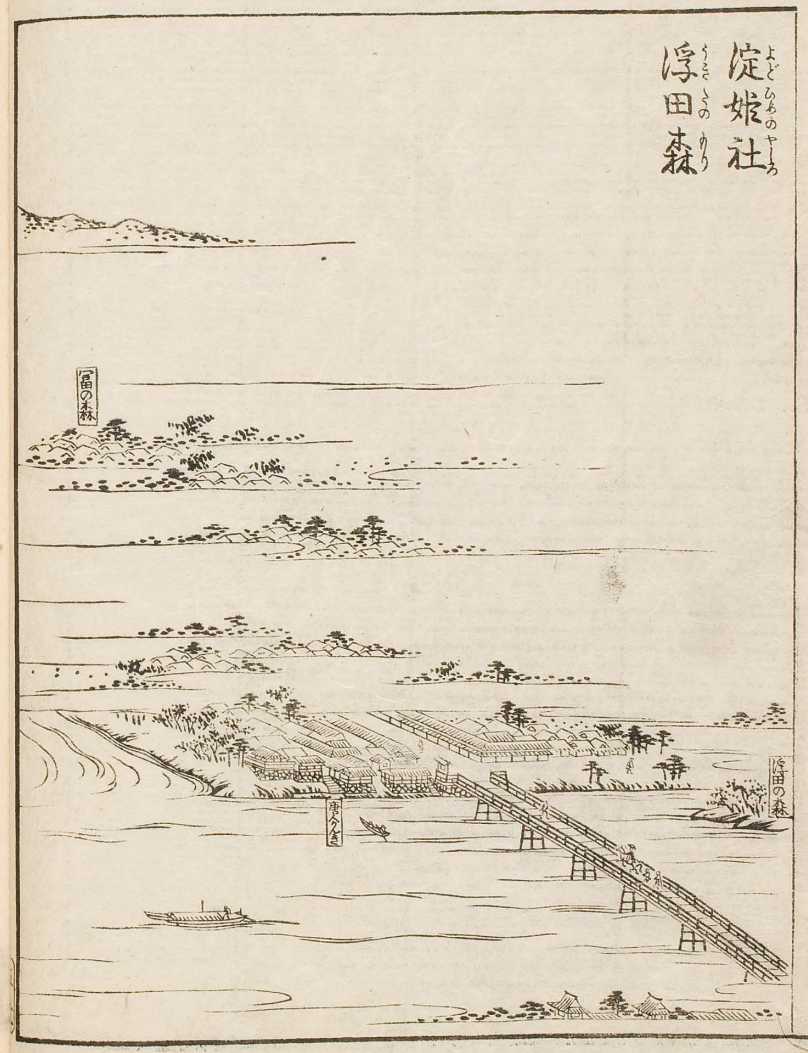
志水正法寺
地蔵
天満宮

德迎山正法寺は男山の南志水にあり浄土宗にして洛東百万遍に属す
本尊阿弥陀佛は恵心の作なり當寺はもと圓誓上人の草創にして
天台宗なり中興聖譽上人浄土宗と改む後奈良院御宇天文十六年
に當山の第十一世傳譽上人桑田にして説法し奉る事ありしを起
端とす　德迎山の額　其上勅願寺と云
尾州大納言源義直卿の御母公
櫻應院殿の御菩提所なり
女郎花塚　志水の南八町　人皇五十一代平城天皇の御時小野頼風と云優人
男山の禁みもあり京より女房おそなふ連理の契浅からざりしかの女
八そくの人なるゆゑにて頼風が事なとをあらはさるをそのあらはしほどん
じめる女房はまたが其所へ行ぬとて女うらみ恨くやしく胸せまり遂
に放生川の堰に投身をなげ捨身を投て空しくなる其後ちて
女郎花生出るとなり頼風は花のなかふるすれば女郎花の根なる風情
あり頼風はあれなる共に身を投て死なり其所を後川と云放生
川の上なりとなん漢の何文が女郎塚に女郎花の生なるも珍しきなり

古今の序にも男山はむかしを思ひ出て女郎花は一時なりとかけり　班姫
女郎花　ぬれぬれぬれぬ
衣形り　鐵鎚にもるしに女郎花
如法經塚　男山の西に桓武帝王城結護して　心老橋　志水の南天神森に行る
四方に經王を埋らる山所を南岩藏と云
河水橋を渡りゆく山名　美濃山　志水の巽にあり後白羽院の愛妃美濃局山所
あり土人の口傳なり　ふもとあり侍宵小侍従を山人の作なり
洞ケ峠　八そくの南は里にあり山城　高野街道　志水の南より西の田口村へ出る道
西の門の堺を南峠ともいふ　弘法大師此所にまつり給ふ
王塚　志水の西より内里村の山にあり　岩田　やくこの西より一里ばかりあり
繼體天皇の陵なりと云　山里の氏神にて万葉九の巻式神の字
合の御山品の石田と称しは醍醐の南なり延喜式に久世郡石田の神社と
兩所とも名とり宗祇は作の道猶の西とひ松阿は山科を用ひる者ふまりて其所を浄瑠璃
詞花　藤原為顕
山ちろの石田の杜のいとなくも心のうちに思ひてしかな
ちりぬるをそれ鈴やこ山ちろれいてこのをのもゆるかりかもん　後九條
美豆　淀大橋の南瓜の里なり大坂街道なりてむかし美豆の御牧とて廐あり
後拾遺　入江森野和歌の浦
又月雨ちさこのみまれれはこも苔川の流塔もなのりとそぬ　さぐみ
続千
胡ゐくちろの上野より茅のきのこの行を見ちろりはく　順德院



淀姫社
浮田森



淀
拾遺
いつくとふ
唱てもり
らん
かくく
きん
よとの
海りの
きく
夜
ゐる
きん
忠見

淀の水車ハむかし
よりありて耕作乃
たあかを秀吉公の
室淀殿さんが使ひ
めしよう撥中乃
用ことなん

淀川は五畿内第一の大河にして六国の水こゝに帰会す　山城 近江 河内 伊賀 丹波 摂津
河水は清うして溶々と長川のながれゆく難波津へゆききの舟は夜と
なく昼ともなく城郭の汀には水車ありて波に随ひ翻々と
めぐる領主の茶亭橋上のゆききは京へ遼々として絶ずと
此所は鯉の名産にして美味あり高貴の献上とし常は遊猟を禁ず
いへるなし

新古
かりくらしかたのゝましばおりしきて淀の河瀬の月をみるかな　公衡

風雅
五月雨に岸の青柳枝ひちて梢を渡す淀の河舟　隆教

玉葉
さす棹も及ばぬほどの水に行てや下す淀の河舟　冬隆

淀の大渡　いにしへは木津川御牧の西より此に流れて宇治川と合し舟渡しあり
されば今のごとく木津川を南へ通ぜしは秀吉公の御制作なり

大橋　木津川のまたりくる橋也
長サ百四十間あり

小橋　宇治川伏見の澤筋の下流にかゝる
橋なり長サ七十八間城郭造営の時
かけ初し
なり

淀姫のやしろは小橋の西にあり祭る神は二坐にして中央は淀姫神
東の間千観内供　若宮は本社の西にあり多宝塔には大日如来を安
西の間天神

置す当社は千観法師の勧請なり此所の産土神として例祭は九月
廿三日神輿一基あり　宮の渡しは当社の鳥居前より桂川の落合を小橋
の小路への舟わたしといふ　唐人屋敷とて朝鮮人
来朝のときは大坂より川舟にて　天神口　歓喜院の
此所より陸地を行けり　舟は茶屋へおもむけるとぞ天満宮の社あり

大荒木杜　いにしへは此所より西にありしとぞ今さだかならず

古今
大荒木の杜の下草老ぬれば駒もすさめず刈る人もなし　読人しらず

後撰
大荒木の杜の草とや成にけむかりにだにきてとふ人のなき　忠岑

新拾
郭公きなきて帰る大荒木の杜こそ夜の中宿りなるらし　信明

伊勢向宮　小橋の西にあり天照大神を祭る此所
淀潟なり洪水の時も浸る事なし

浮田森　むかし此辺にありといへり大荒木の杜浮田杜と
詠合せし和歌多し後人考あるべし

続古
かくしてやさてもみるべき大荒木の浮田の杜の標ならなくに　人丸

金
あまくだるあら人がみの浮田の杜に住よしの神さびにけり　為実

新後撰
初しぐれ浮田の杜をそめぬらむ紅葉しにけり　兼氏

続千
下草は人もかりにもこぬ大荒木の杜は浮田に早苗とるなり　津守国道

竹田
北向不動院
西行寺
城南神社

小枝橋
城南林
八幡社
月見池
西行寺
西行橋

秋の山
下毛羽
蓮福門桜塚
茶所
観音堂

芹川里を淀の東北半里ふありいあしへを天子遊猟の地あして行幸

たくさどありしし　むしへは山里ふりあして三尺の根芹生ん　故ふること今は民村となりて人家多し

後撰　仁和御門　嵯峨の御時の例まて芹川ふ

行幸し給ふるとゆ　絶あり芹川のふ代の古道沼を河ゆ　行平

さのの山ゆ　家隆

新後撰　雲ゝ　れんふ代の古乃ふ　分て逢芹川のふ　あ業橋らん

けさたふもよ紙こあそれ芹川や作田のさるへ　立ふ　後拾遺

城南神のやしろを芹川のふあり　伊勢石清水加茂松尾平野　摂津　春日の七社をるるり

八幡宮い森の東ふあり　例ふい九月廿日社雲二基あり上鳥羽　下鳥羽塔の表作田の民祝しる

城南離宮を鳥羽上皇寛治元年ふ造営あして遷あ仙居るり　旧地を芹川の

ふり作田里を限しる御所の南ふ門あして御殿い東面るり門前い鳥羽街道

あして淀ふるる今の道い後世作るり御所の地多く田の家しる

北殿南殿田中殿馬場殿車殿等の名あり池の廣を南ふ八町

東西六町あして蒼海紙摸して中ふ島紙作り蓬莱ふ紙築て巖を

巡舟を泛て帆を飛し烟浪渺々し掉を飄して碇を下し去を花れ

陰あて月卿雲客楽紙奏し秋を池水ふ月紙浮ふ玉を客秀涙を吟沈

上皇を元茶寛仁の御仏源しして里人ふ牛車紙永ゆるしうるへ

又鳥羽殿ふを農書れ法華紙繍し安楽寿院れ定海ふ命して

孔雀明王の法紙修せ　むされ法皇崩じて忽保元れ乱しるり

後白河院い宮ふ塾し生まり沼ふ芝殿して多ふ田禁ふるる

新後拾遺　るふしるく物悲しくを花ふしるる多ふ田れ面の秋れ雲　園位法師

小向不動院を城南神の良ふあり本を不動明王い興教大師れ作ふ当院を

鳥羽院れ御建立あして王城の鎮護し寶祚延長れ勅願所也　興教大師

の見沙門天ふ系紙の山に曩遮生の珠紙感降ふ鳥羽上皇ふ

潮り不動尊眼郎の御御貢ふ収めしたりしを

美福門院の陵　不動院　門おまあり

西行寺い不動院の小西側ふあり鳥羽の離宮あしし所に住しし

宅地るり　月見池利髮塔房家の墓人ふあり作田村の卿士

長谷川氏い西行法師れ苗孫るりしを　新古

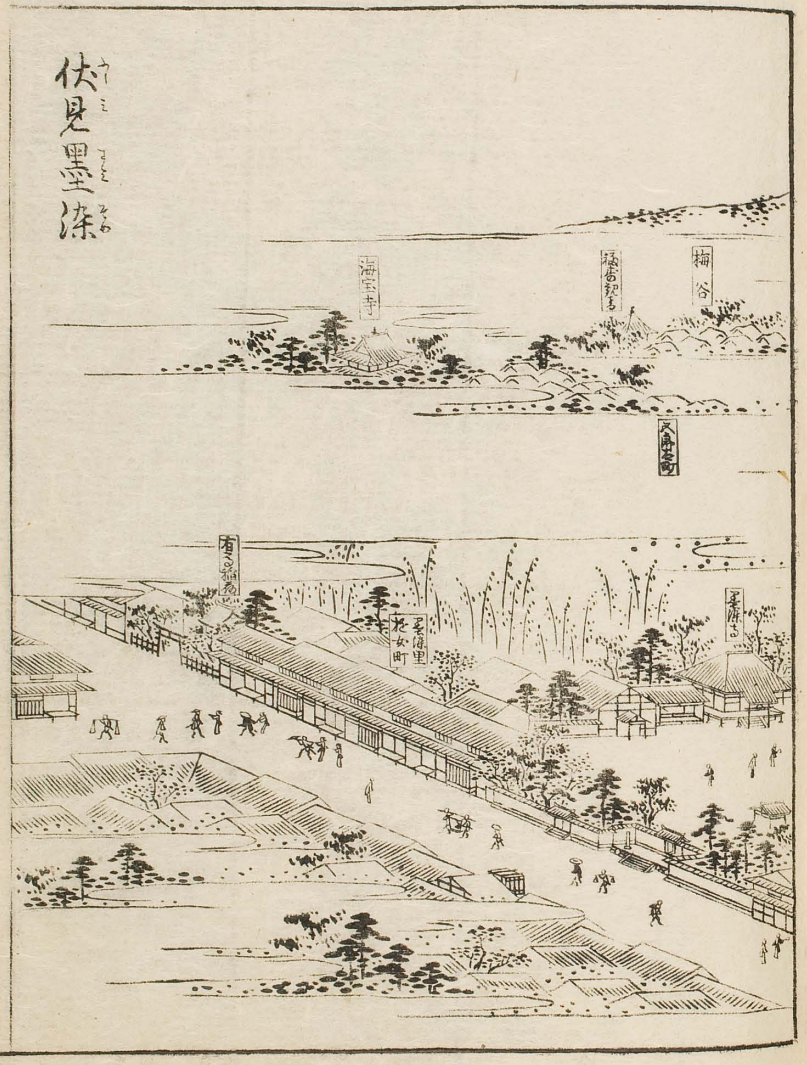
ゆ　あこの梅さりるる我宿をとこ花も人ゆ知ふまをれ　西行法師

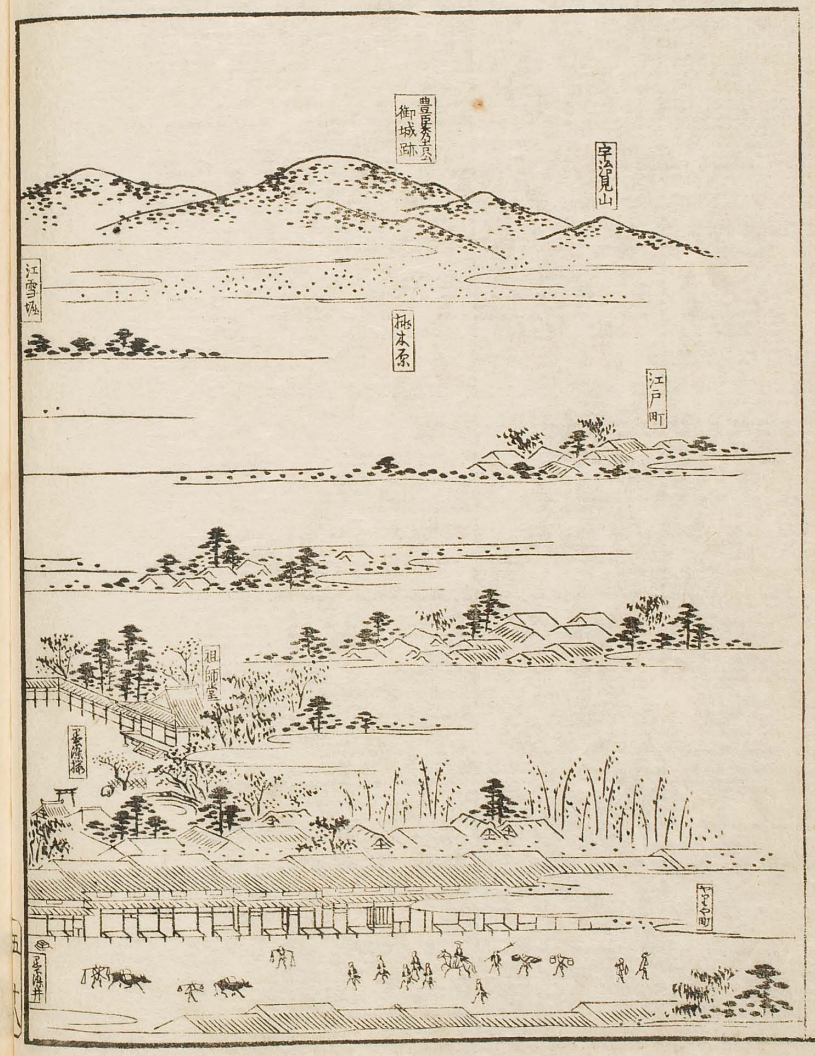
二重塔
抗木社
新御塔

安楽寿院
本御塔
五佛三如来
こしん塔
経塚
石

安楽寿院は作田里不動院の小堂なり鳥羽上皇脱躧の後城南の離宮に
ゐしく小殿をこゝに建て當院といふなり保延三年十月十九日覺行
法親王祝導師にして慶讃あり　宗旨は真言なり
本御塔　小のくるの本堂をいふ　古義新義ともに修学院
五重の塔なり　本尊は卍字阿弥陀佛と称す　導師の胸面に
卍字あり堂の下には法皇養親の法華経を　薬師堂　行基菩薩の作なり
収むる所なり當院の寺鎮なり　茶所如来を安置す
三躰土佛　釋迦弥陀茶所の三像なり　五輪塔　無銘なり上皇如法経
弘法大師の作なりと　塔所なりと
碁盤梅　上皇城南の宮中に於て圍碁を禁じ給ひ碁盤を集めて此樹下に
埋むさせ給へば此梅に名とせり當院は今は廢して圍碁を禁じたるなり
冠石　本御堂新御堂の間にあり冠の形に
似たるゆへ名とす
新御塔　南の方の本堂をいふ　本尊は地蔵菩薩にして定朝の作なり　奥院の
こゝは五重塔なり
鳥羽院震殿美福門院紀　鳥羽院の女御八條女院は紀美福門院の
近衛院の御母なり　御念持佛
三脇は新御塔の二重塔　阿弥陀佛を安置す　毎日の作なり　此塔は豊長秀頼公
脇は安置　荒神と
鎮守　の御建立なり
鐘　本町は作田は異五町にあり秀吉公伏見御城の時淀魚掃部前京公寄
とのふ慶長九年十二月に傾城町免許あり　所なり　今は年紀荒廃に及ぶ
墨染を鐘本町の小三町とのりにあり　むかしは此所なりしも染殿とひて野亀
みい橋多し寛平三年堀川を改大炬昭宣公薨し給ふ　附上野岑雄義
傷の和歌を詠ぜられ橋墨染と咲しとあり
源茶の野亀の橋しるあるべし　此茶とうり墨染とさけ　ひとを
菅公は神詠あり梅もて小飛趙師雄の夢ひ美人に寝覚の枕のうへ
嵩山の松を青牛と化し康頼入道の寶物集あり茶本公なりしかも
物のあれば知れいさをその去に墨染と咲今は源茶は墨染橋とそあり
とゆゝしきいは其ほどもありしとなん
墨染寺は日所南側にあり貞観帝　清和天皇　陵墓のちゝめに寶祚祈のあ大相國
忠仁公は建ひし貞観寺の旧地なり今は法華宗にして日秀上人開基に
慶長の比は方丈書院魏こゝにして秀吉公も御成あり所なり
墨染橋　堂の前にあり件の和歌を　墨染井　當寺の門前町の西茶店
のまへにあり由来さぶらふべし

伏見墨染





竹の素山
少将通り
木堂

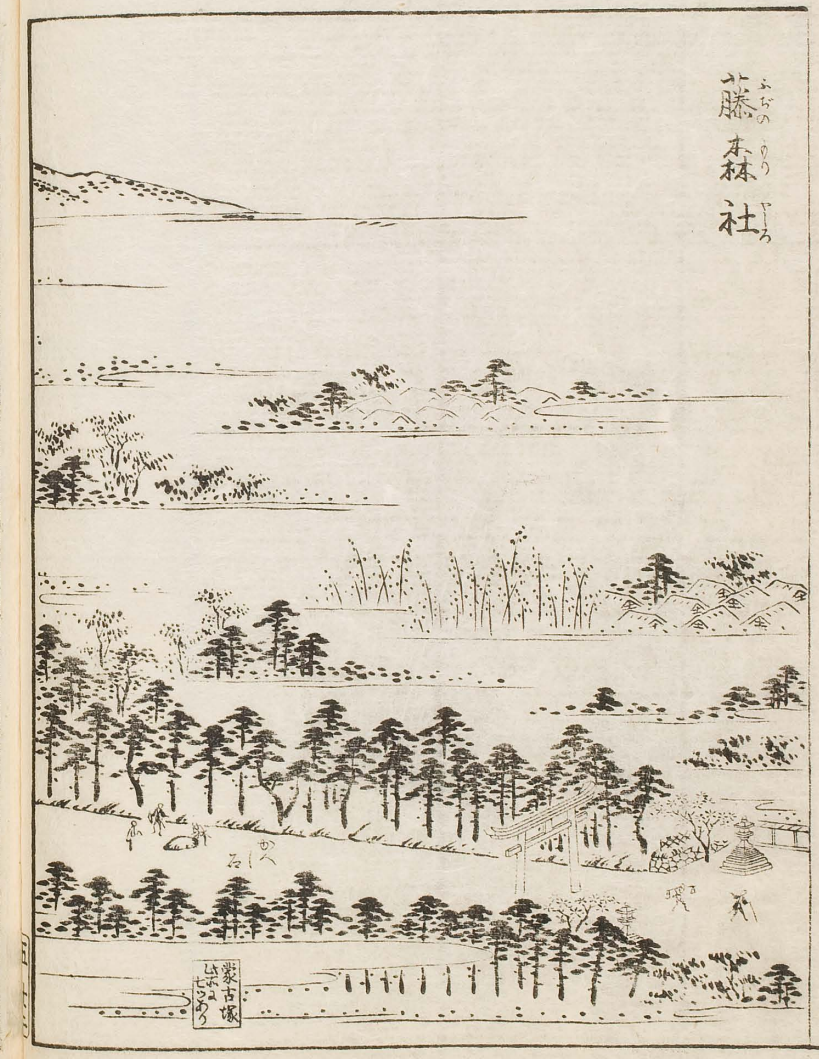
源仲
俊澤寺
四位少將古蹟
方丈

依浄寺は墨染の南にあり浄土宗にて本尊は阿弥陀佛 [illegible] 安置之像
聖徳太子此地にいまへ源州お將の墓宅なり 寺記に曰四位少将源朝臣義平
十六の年 弘仁三年三月十六日此所に葬る お將の塚 小野小町の塚 堂のうしろ池の
卒しのんぬ [illegible] 郷の長さまにて [illegible] 長民宮郷と号
墨染井 此の所に少將のよし [illegible] 道 此の辺の [illegible] 茶の国にあり 小町の宅 小野庄
犬塚の [illegible] 百姓のよし [illegible] 道 [illegible]
[illegible] 道元禅師の石像 [illegible] 道元禅師入宋の
[illegible] 所にこしらへ [illegible] 禅寺 七瀬川 [illegible] 石像の
[illegible]
竹の下道
源茅の竹の下を分るそうこんの [illegible] 香乃明朗 前関白[illegible]
藤社やしろは墨染の小にあり本殿は中央に舎人親王なり 早良親王
西に伊豫親王 [illegible] 本朝武功の神と配祀 [illegible] 神武天皇 神功皇后 日本武尊
武内宿禰等 故に弓兵政所と号
舎人親王は天武天皇の皇子にして天平寶字二年に追尊の宗乃盡敬
皇帝と號を 日本記を撰 例祭は五月五日にて [illegible] 武奥州 [illegible]
走馬 [illegible] 光仁帝は神宇天應元年に異國の蒙古日本攻来 [illegible]

攻へられて天皇皇子の皇子早良親王を大將軍として退治あるべしと
宣旨を給る親王當社に祈誓して五月五日に出陣 [illegible] 神威いちじるく忽暴
風大に吹来て蒙古の軍船沒 [illegible] 悉亡びうせ [illegible] 吉例により毎年軍陣
の儀を [illegible] 天下平安祈禱 [illegible] 當社を弓兵政所と云 所謂 [illegible]
旗塚 本社の [illegible] 神功皇后 [illegible] 蒙古塚 當社森の中に七つあり [illegible] 今 [illegible]
退治の後旗 [illegible] 埋 [illegible] 夷賊退治の後軍將の首
[illegible] 埋て神底 [illegible] 力石 [illegible]
源州野は藤社森の北にあり大亀谷より竹田里南に墨染小稲荷
を限るなり 欽明天皇いとけなくまします [illegible] 妖美に化人来て君臣
秦の大津 [illegible] 求て補佐 [illegible] 天下安泰 [illegible] 有 [illegible]
後 [illegible] 曹司小 [illegible] 容 [illegible] 圖して [illegible] 源草里に住る [illegible]
洲連て朝覲 [illegible] 天皇踐祚の [illegible] 大藏卿に住 [illegible]
[illegible] 日本記に [illegible] 桓武天皇の陵は東の [illegible] 本谷口と [illegible] 所にあり 車
塚は天皇社に神車 [illegible] 埋 [illegible] 所 [illegible] 神輿塚 鎮宇松 霞の谷 霧の谷

源草天皇は建久嘉祥寺も今は嘉祥寺畑と號て字とのみあるの
塔は元慶八年に建らるく近江は國米百五十六斛丹波の國米三百七十
九斛に貞觀錢十二貫文勅して毒所あるの三代實録にみえたり仁明
帝は陵同女御貞子の墓あるは尤大臣冬嗣公の別業大納言時継卿の
莊真幡寺社拜志寺大日寺後源草院の陵昭宣公の營ぬ極楽寺も
今は里の名とのみて遺りぬ源草の郷中は高貴の別莊名賢の古
廟霊佛の寺院かぞくあり知らるも千載はむなしくとりて村老は
祢ふのみ聽ぬ桑田碧海須臾に変ぜるかとは
源州の里の風物さひしきも絶ぬ跡人乃社風　通具
つゝみのもとの乃絶て積れば雪乃源草の里　爲氏
源草や旁の離れ住て荒れ果て里に哀なりけり　雅經
鶉の床は源草野の叢に巣を作むとすらん
野に鶉の床らん所一所ある作れ茅ぶの
重なり後世和ふとそ思ふるその名
むかしより鶉の名所ありて聲は他境に傷れしかとして都下の詞客中秋
の頃ちかくなりて炎聲弦用也して鶉はあれる野に呼ぶ義探ぶ中も鶉なく
あれは鶉の床も荒て名のみとなるはかりなり里しかり行よ源草は荒て家うの茅ふ
源草に鶉弦涙合ぶるはかりなるの作例なり
千載
夕されは野邊の秋風身にしみて鶉鳴なり里の星　俊成
俊成は秋ある人雖して思秋風にうそをうぶ身ふしぶ秋ふしぶ秋
俊成は秋いろく思秋風の身みしむとそひてはいろゝみ曲るし鶉とるりそ
風も身にしみて鶉なくそとてうろうろとすれひしりて僧人聽を
消しては逸しこしかり
源草の山のさ松ちく淺ちふ夕風ぞ吹ん〳〵帰るう　寂超法師
新拾
源草やうりうれ床を乃絶て荒れ果しこ宿のこ名　慈円法師
奥山源草の名ぶ山は猿九ぶ山ふ名ぶ作り所ぶ竹巣山野の内ふあり安楽行院の
後古
ぬちんとうや竹は柴ふの名ぶ旁ふ人ぶそみへも鶉ぶなくなり　家隆
安楽行院は源草殿ふあり法勝殿舟院ふ屬ぶ本尊は不動尊ぶ
の二尊ぶ安楽堂前ふは後陽成院の御廟あり
真宗院は安楽行院ふ近ふ所ふあり澤土宗ふ所ふて源州流義ふ本山ふ
本尊は阿弥陀如来ふて開基は圓宗上人と

八幡宮
住吉
天満天
くまの
大将軍
本社
殿塚
古社
神宮殿
文殊
菩薩
十八日堂


藤森社
蒙古塚

藤れ森の祭ハ毎年五月五日ふして當社の神蒙古退治れ爲出陣しゆへ八月ろり月ろ月ろと宵宮ろり神前ふ鎧と鍬てあふの日ハ一枝稲荷花の森おく朔ろり走り馬あり

世ふ端午の佳節ふ武者人形をかざろハ蒙古退治の古例ぐろり始ろ

常夜燈

瑞光寺は源草極楽寺村にあり佛殿の本尊は釋迦佛長六尺脇仏五躰あり明暦
元年に元政上人草創ありて法華の道場とし給ふ　当寺境内の堂と茅師堂とは
古の極楽寺の茅師堂の遺構なり
元政墓　佛殿の西にあり塚のうへに竹植ゑ元政法師
常に携へ給ふ竹の杖なりとて極楽寺にあり
道の記に政田菴にて
古めかしく門日暮ぶるれば常の佛れ拝しまつるべを
たゞ釈迦のみまへにくれぬるかな
落れ初し釋迦ぶ源しや秋の道　鬼貫
昭宣公の墳は瑞光寺の門前にあり大塚にして巡十間餘り上に社あり　三十番神
堀川の右大臣昭宣公身はうるはしく財ふかく茅のかをりをうしなはるのちにあり
を埋をりくるもるくさめ古茅山は烟とぞなる　僧都勝延
極楽寺の回廊は寶塔寺瑞光寺境地に大慶法師の琴れ爪を洗ひて失ひ給ふ　昭宣公幼童の時
誓願の人果して法華に上り逐に極楽寺を創建あり
保胤が極楽寺の賦は東山の勝地象外の境壺中の天にして巽は碧羅山あり
翠浪の湧は如く谷水は玉虹の流をなすとぶ山おろしは真勢千万仞の山の狩
如し飛泉あるは細しとへども其聲遠境に聞ゆ　今は宝塔寺七面山の
茅屋飛瀑なり

瑞光寺
元政法師
舊跡

七面社
拜殿
目疾面
十躰堂
番神堂
拜殿
本堂
鐘楼

寶塔寺
歴代塚
寺中

深草山寶塔寺の瑞光寺の北より法然宗にして本堂に釋迦多宝の二尊高祖
日蓮上人の像を安置し廟塔に日像上人の御し題目の石塔婆ありそし下に
日蓮日朗の遺骨を収むられを宝塔と　日像の説法石に釋迦千躰堂の内にあり鎮
守社あり二十番神を安置し七面明神社を本堂の後にあり是経宗擁護社と
称し九月十九日の鳥居の額に元政上人の筆と當寺に詣侍りて真言律宗兼ねう
延慶年中に住職良桂律師日像上人の教法に従て法華道場と改む
百丈山石峰寺に宝塔ありの小さ儀ら用山に芙蓉の六世千呆和尚の退院の後に
佛殿に釋迦佛額に濟世法王又龍石に聯あり共に千呆の筆と表しの額を
即非の筆にして高着眼と書し
薬師堂に佛殿の前にあり本尊薬師佛長四寸惠心僧都の作にして多田
満仲公の念持佛と村上帝御宇天德二年に攝州多田郷に移し満仲公
伽藍造営ありて沙羅連山石峰寺と號し本尊弘安元年に其後文永
の頃兵火のうあに諸堂回禄に及び時に本尊像弘石函に収め山中に埋む事あり

霜星累りて慶長元年の春沙羅山夜〻光あり鄙人怪みて其光の本を穿しに一の石函を得たり蓋に沙羅連山石峰寺某師仏の銘あり則宇坂堂に安置した日八年に菴主宗玄といふものに夢中の霊告あり都近所に寺を遷し安置せば普人民を化益せんと宣宗玄仏意を仮て自省に夢を覚ます

ふやうに五条にたり因幡堂に暫安奉しいまゝ五條の橋東若宮八幡の辺に堂舎を立て石峰寺と号し宝永の頃黄檗千呆和尚常に此寺に住て薬師堂に尊信あり日本一渡り英僧山の祖席山司職をる事偏に霊仏の應現なりとて厚く瞻禮恭敬せ〻ら〻れ公命あり

今れ如く百丈山と立て尊像を安置し石峰寺と号する

茶碗子 泉の銘と當寺の門前南のくにあり 茶の湯を可なりとて好人これを賞ん

即成就院を源草れ云し大亀谷にあり本尊八阿弥陀仏の坐像を脇壇に二十五菩薩〻〻恵心の作と霊像に恵心僧都叡嶽楞川にあり説法しの〻に対

三人の老翁本りにれい那れ南伏見里に住とのこ〻齊と捧んを仮て恵心真

詞に應じて伏見に来り指月のかとりに艸庵より此の翁を立て佛面に向て極楽浄土の寶味なりとて捧しに僧都奇異の思ひ仮し老翁に何を云て答て我佛五世に有し唯摩居士の化現と師の法徳仮感じて本る恵心を仮ちて拝し其に正真の如来仮拝せ〻ら仮預に翁則西れ空に向て敬礼し〻ら〻忽ち紫雲を乗びたる楽と共に本土阿弥陀仏二十五菩薩空中に現れ翁に粥あり老翁諸〻西れに飛ち僧都感信の餘り則本逐の相仮自刻で當寺の本尊とし〻の〻毒永の頃奈須與一宗高平家追討のため出陣の時當院に詣で祈誓して曰今度戦場に赴て凱旋仮潔さしめ〻當院を再建と〻と則佛前の幡を立て笠を下し西海に下り壇の浦に扇の的仮射て夕参を天下に響に是本尊の擁護なりとて堂舎仮修造し願を成就の奇特仮世に知〻しめんとて即成就院とぞ名づけける

那須與一宗高石塔 堂のあるあり高さ三尺計りして 血銘あり笠石は頃の内にあり

軒端梅 塔婆の傍らにあり 由来詳なるに

根武谷家
薬師
医師

即成就院
那須與市宗高塔
本堂
笠石
与市の塔

大亀谷は藤の森より勧修寺坂を経て山科追分に出る街道をいふ此所に茶店ありて容顔艶しき女あり名をお亀と称す自然と所の名に呼で大亀谷といひしとぞ

吉利倶八幡宮は勧修寺村の産沙神なり　祭は九月廿一日なり当社の神木に種字ありといふ今坂となして社頭にあり蘇に阿弥陀の梵字あらはる　此所の名を勧修寺村といふ　当寺の宮にて上古は華厳の守護神を

勧修寺は大亀谷の艮の方なり　兼より本尊は延喜帝御等身の観世音なり　長吏は開基より範俊僧正延喜四年の建立にして本願は右大臣定方なり東大寺の寺務にして勧修寺御門跡と称す

氷室池は当寺の庭中にあり

大石屋鋪　勧修寺より七町ばかり乾山科郷西の山岩屋明神の馬場先北側薮の中にあり　大石内蔵助良雄浅野家断絶の後ここに潜居す近年碑の銘を建つ

栗栖小野は勧修寺より北花山のかたへ行道の程をいふ

夫木　さし枝のくるすのをのゝ萩の花ちらん時にかりて手向ん　大納言旅人

田村麿墓　栗栖野醍醐道の西の林の中にあり今此所を馬脊坂といふ　弘仁二年五月廿三日薨ず年五十四

大宅寺　勧修寺の北大宅村の南にあり古此所は大織冠鎌足公の居館なり今は曹洞宗月坡和尚一宇を建て大宅寺と号す此里を大宅といふ所以は閑院大臣冬嗣公の御孫高藤殿秋のころ小鷹狩に出給ひ山科のあたりを過給ふに風雨頻にして雷なりければ供人もちりぢりになりけり此君は御馬飼ばかり供してある門の内に入給ひぬるをも雨風はげしく雷おそろしかれど今宵は此屋に宿り十三四ばかりの女のありしに契り給ふ名残に佩給ふ太刀一腰残しをき給ひぬ其後六年ばかりを経て恋しくおぼし此屋をとひ給ふにかの女のかたへに五つばかりの女子のいとうつくしきが立出て膝に居ければ此児は誰ぞととひ給へば一とせ立よりし世の人のわすれがたみなりと聞えければ高藤あはれに前の世の契ありけるとおぼして車に乗せて帰り給ふ此家の主は此郡の大領宮道弥益といふ者なり此女子二人誕生あり高藤后となり御所にはかよふ事ともありしに後に大納言となり男二人は泉の大将其女は醍醐の帝の女御にまゐり後に朱雀院村上の御母后となり給ふ三条右大臣此姫君の子なり宇多天皇位に即給ひてより弥益も四位に叙せられ家を寺となし給ふ今の勧修寺是なり其後の家は塔を建て大宅寺となりぬと云ふ已上小世継物語の大意

興福寺の旧跡　大宅村のかたはらにあり旧号は山階寺といふ　興福寺橋は岩屋の社鳥居の巽にあり

松彩池　岩屋の社南の薮にありと云ふ松彩山といふ

小野随心院は勧修寺の東にて曼荼羅寺と号す真言宗にして開基は仁海僧正なり　開基仁海は小野僧正と云ふ寛仁二年六月大に旱す此僧正に勅して神泉苑に於て請雨経の法を修せしむ時に大雨降事三日なり其後九度詔ありて皆雨をふらす世人雨僧正と呼　永承元年五月十六日寂す年九十二　已上元亨釈書

小野御門跡と称す摂家の御連枝住職したまふ

小町水　門内南の薮の中にあり此所は出羽郡司小野良実の宅地にして女小野小町住しより此水を愛して艶顔を粧ひしとぞ

榧の樹　厨のまへにあり源の某がおね此地にて百夜かよひ梅遂しとなり

深草少将の通ひ路　醍醐往還の西側薮の中にあり墨染の南欣浄寺の北より小町の宅へ百夜のかよひ路なり竹林とやらいひて行一株もせざりしとぞいふ　百夜通ひし

櫻塚　小野村の西にあり小野小町の文塚とも一説には後小野宮道の墓ともいふ

野色山　道の西にある小山を　貞塚　四位が百夜通ひし粉を積し所なり

下醍醐
石戸谷
小町の水

五重塔
本堂
八幡
黒仏
清滝社
白山

上醍醐
五大堂
岩間寺道
清瀧社
見返の石

笠取
白山社
同山寺
薬師堂
行場

深雪山醍醐寺は小野南の方山上なる上醍醐と下醍醐と號す昔は真言宗にして修驗道と理原大師と謚に延喜四年の建立なり醍醐朱雀村上の三代帝王の御願なり聖護院の流義法務は三寶院御門跡と称し摂家の御連枝なり當山なる醍醐と號する聖宝尊師佛法相應の霊地なる得んが為に七箇日祈念し給へば五色の雲當山の峯に聳ゆ則山に昇りまします巡りなる獨の老翁來りて清泉なる饗を醍醐味なりといひて尊師に奉あるべし山古佛練行の洞諸天衛護の砌前佛の遊處名神の所居なりなる地主の神挨尾明神と永此地なる師に獻べし早く精舎なる營て廣く佛法なる弘群類を利しめん擁護せんと云終て見へなる又指の多き三寶なる唱へ尊師涙感涙を流し山岳なる上奏に延喜帝なに感感あらせ給延命のなる當山の諸堂を造営しめ

本堂 某師如来を安置に田祿の秀吉公の御建立なり

開山堂 弘法大師理源大師の像を安置に曼荼羅を清滝權現 泉迦羅龍王第三の姫なる例祭は九月九日山門の祈禱なり

五重塔 佛言説相の三寶院の左中尊なり

藤戸石 藤戸浦にて佐々木三郎盛綱高名の岩なり天正年中聚樂亭より山所に移し

長尾天滿宮 本堂の北なる九月九日にして神輿二基あり醍醐卿中の為御神

花見山 秀吉公花見遊宴の地なり天正軍記

上醍醐 麓より山上まで二十七町なり一町毎に標石あり石面に梵字なる成賢の筆なり脇龍の埴不動堂より女人の登山なる制禁に

清瀧社 龍神祈願石社壇

醍醐水 閼伽井なり

五大堂 不動明王を開山聖宝の祭四尊なり

清瀧社の内にあり

如意輪堂 本尊如意輪観世音を安置に

理會僧都の祭なり延喜帝祈願なり朝敵平將門降伏のなる祈願なり本尊なり

聖宝の祭なり西國巡礼所

藥師堂 本尊藥師佛は恵理僧都の祭なり堂内小薬師脇侍観音を安置に観音堂開祖の聖宝の祭四尊なり

後なる祖師堂 中央聖宝尊師南は弘法大師北は空海僧正を尊崇に

の鱗二尺なり悪地なる退治しめ二尺の蛟則聖宝の祭なり悪地

堂内にあり

寂静谷 祖師堂の北にあり毎年七月廿日六日當山の千日詣なり

堂内にあり

橋

文當山は松柏翁鬱として常に白雲接く語なる封じ山沢巍々として旭日に出る本遅し霊泉は混々として注くなる如く堯の御德茂し清平なる醴泉出夏后の御俊才官に当なる則醴泉涌とひしも山醍醐水のことひるなり

一言寺

醍醐天皇陵は三寶院の小人家れ東ふあり（人皇六十代の帝醍醐と號仕宇多帝第一の皇子王位三十三年延長八年九月十一日崩ゝ御壽筭四十六延喜御門と稱ス）

朱雀天皇陵は門所陵町ふあり（醍醐帝の皇子ゝ御ゝて六十一代の主上なり主位十六年天暦六年八月十五日崩ゝ御聖壽三十歲天曆御門と稱ス）

一言寺は醍醐の南里ふあり（眞言宗ゝ醍醐寺ふ屬ス）本尊は千手觀音ゝて安阿彌の作之内侍堂ふは當寺の本願阿波内侍の像ゝ安置ス少納言信西の

直谷南禪院は醍醐山の巽ふあり家賢僧正坊遁の地なり本尊は阿彌陀佛の坐像ゝて毎日の作なり側ふ地藏尊ゝ安置ス（山里は農夫常ふ尊信しなれゝ一夜の酬）

世人田地の地藏と號ス

笠取山（醍醐の民村多く巽の峠ふ山城近江の國境あり岩間寺まで四里ゝ三町ゝ里ふ）

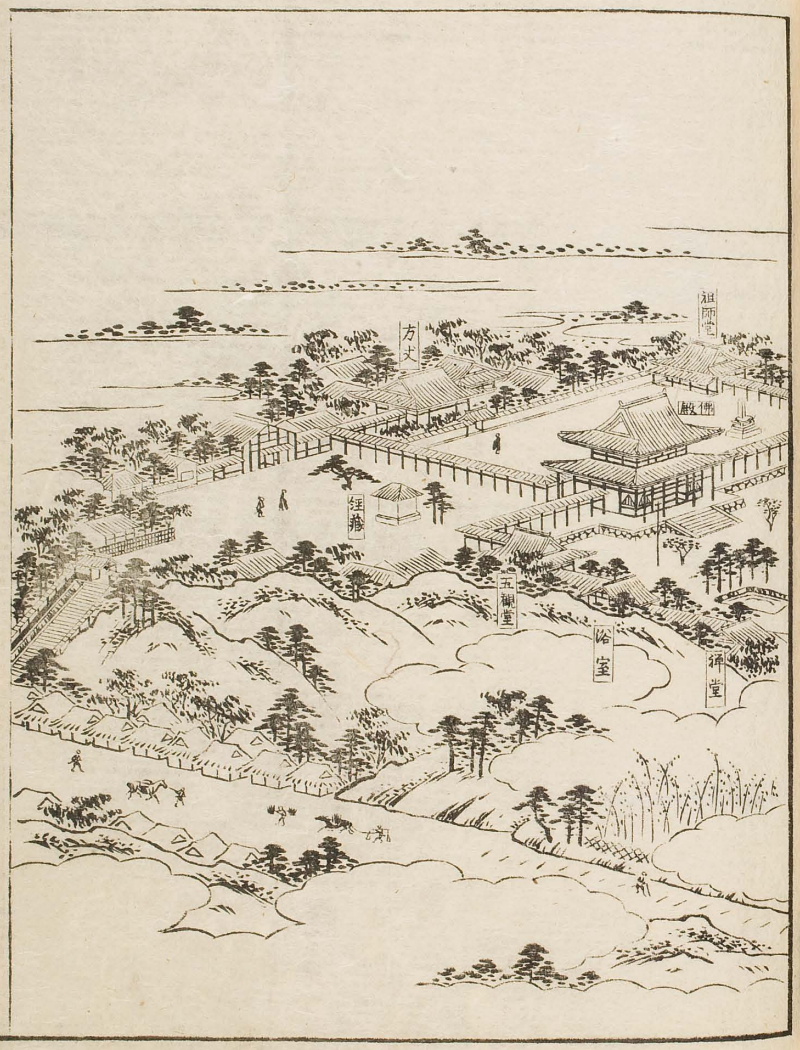
一ゝ本ゝ見ゝのなくゝや出あくゝん村雨ゝれぬ笠取の山　西行

笠ゝのゝ山ゝたのみしらひもゝくゝ風ふ神をぬしてをり　賴基

日野の
藥師
本堂

日野薬師を一言寺の南日野村にあり法界寺と号に本尊薬師如来を金銅
の坐像に日天月天十二神二王等運慶の作なり右に安置に世人乳出の祈願
霊験いちじるし 舊阿弥陀堂あり 後壇に大士の弥陀の像に安置に
定朝の作に初を日野左中辨資業卿の本願なり諸堂魏々たり記者
堂五大堂大門の蹟今田畑の字となりて當寺の小あり日野村の中則
日野家別荘の旧沼あり 今土人内裏の芝と云ふ
重衡の墓日野村素園の中にあり 三位中将重衡卿治承四年南都東大寺の兵
の後重衡々に鎌倉へ下りて木津川にて本津川にて斬首され遂に重衡卿は此の方に納言
佐局は日野に住おいせしが嘆き東大寺に入れ聖俊乗坊ありもうけそちらに法界寺つくり
焼しに骨は高野へ送り墓所は所に築しかり
くりきい平家物語にあり
長明方丈石は日野村のうち五町計外に山脇にあり石床二間四面高
弐丈計一説に名は千人石と云へり 花を金取 炭山の往還にあり地裏
地勢は風景方丈記にくりくりをもて峰の谷に巖の中より清泉涌出る
所あり炎暑の節撫まの舌を潤ひ冷しめ弘法大師此巖を穿あけ給へり
東鑑に曰建仁元年十月十三日鴨社人菊太夫長明入道 法名蓮胤 依雅経

朝臣之舉此間下向奉謁将軍右大臣實朝公云云
方丈記に曰
仮家は則浄名居士の跡をけがしつつ
ところ狭しと雖も周梨盤特の行にだにも及ばず
もしまた貧窮の報のつたなく悩すれば時又安処の
いとなりてくるはせるる具は財まことに乏しかるべし
さいはひに舌根をやしなひて不浄の会佛あさ及ばず
十とせやそぢ成ぬれば建暦の二とせ秋生の晦日に
素門蓮胤外山の庵もてなりぬ
月かけは入山の端もせくからぬ光りぬるかな 長明
石田社を醍醐の南にあり石田社は氏家社中にあり天照太神日吉山王社
祭る山里の氏神なり 和歌に詠ぜ
千載 雑歌 鳴る石田社小野のつゝ草 藤原
続古 抜ちる石田の小野の風小篠しなれてやうるむらさき 中将卿親王
日 春くれて安居もきそふ人数石田社小野は紅葉ぬらん 順徳院
小栗栖里は石田の西にあり山所にあり本幡山に越て伏見城山に出る乃あり古仏
明智越と云へり 天正十一年明智光秀山崎の合戦に敗し江州坂本に城を築おかれ
山道を廻る小栗栖の土民出て竹の鑓を以て害に山ゆくなるべし


祖師堂
方丈
佛殿
經藏
五觀堂
浴室
禪堂

佛國寺
鐘樓
講佛場

天王山佛國寺は伏見城より北にあり開基は英彦山五世高泉和尚なり
大明福州の人なり承應三年日本へ渡海に　佛殿の本尊は釋迦佛と安置し額　音光明殿　高泉の筆なり　柱小聯　四面扎松吾吐九天日月　千重玄揷繞雨彩里山河　共ゝ高泉の筆　禪堂　額選佛場　昂非の筆　食堂の額　五觀堂　高泉の筆　開山堂の額　無盡一乘院
信敬法親王の筆　堂内は高泉和尚の像　安置し　大悲閣は観音　安置し　額は高泉の筆　南の門額　天王山　本庵の筆　柱小聯　揭　高泉
社筆　四衆玄奇　佛國　高泉碑銘　紫銅　鑄　屋　亀の形　共ゝ紫銅　正德元年十五月
廿六日　拾政大政大臣　従一位　金涌水　右の方松の下にあり　水輕くして茶の湯に宜しき
家照公ゆかりの記を
観音巖　千佛臺　共ゝ高泉の筆
伏見いにしへを隴々たる野徑ゆくとこゝに小民村あり　秀吉公の城
なり　大名屋敷　浦法職　大賈人　軒端　町小路　市場　那へ貨
物を通じて交易をなしたり　野山里澤田寺堂　故人の名所
山
城山　松の下にて世に聞る田面に秋風をなく　俊成

新古　義ふかき谷川の水の上に見山松風をなく秋れ　慈鎮
里
新古　夏の夜の通さん人絶ぬ里は柳の里の香の下形　有家
新勅　胡戸明くるうつゝの里をなむれを霧ふむ甘人半洛の河波　俊成
玉葉　茅ふかるうつゝの里は淺ぢふむ形しき霧れ　式子内親王
新後撰　女郎花荒れ下細ちりてたれとゝまれ人ふ咲らん
野
新千　呉井れ　田井
玉葉　あひ　ちりて　住々人の伏見ふ　屋の茶通　もんこに　ぬぎりて　出れ　帝　れて
うて入神ふ　表　ふけ　うて　家々　屋ふ　出さ　人　そ　ゆ　西行
文永三年秀吉公伏見城を築の人　其後慶長五年石田の逆乱に滅ぶ今は　武五
春色ふ　醍醐　桃花の　ふ　奪人
ちれを伏見の桃見とらん
我　衣　ふ　ゝ　み　乃　桃　の　京　せ　よ　ゝ　俊
城　乃　や　ゝ　ゆ　る　火　も　る　く　桃　は　花　舞福
梅溪　城山の五鼎を町のあり　山地に梅花多し　早春の花魁の清香　賞
美を清涼房　福寿　記る　所　あり

本社
春日
九品堂
拝殿

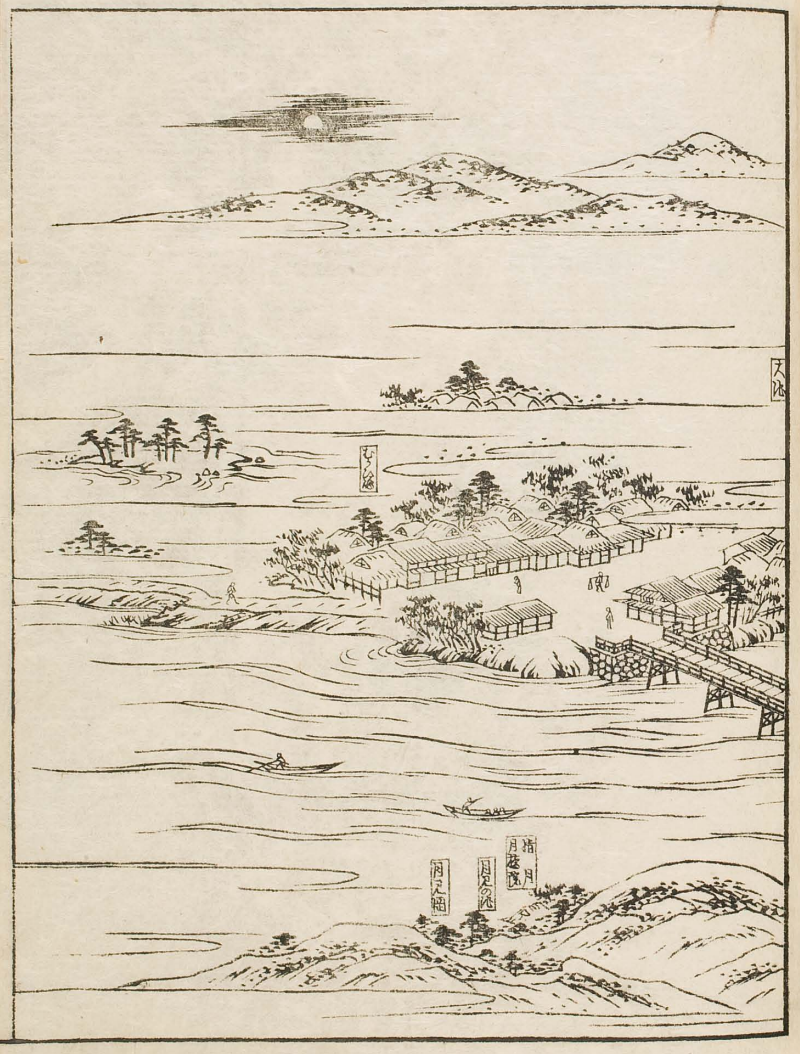
御香宮

京橋
八幡宮橋

伏見船場
中書橋

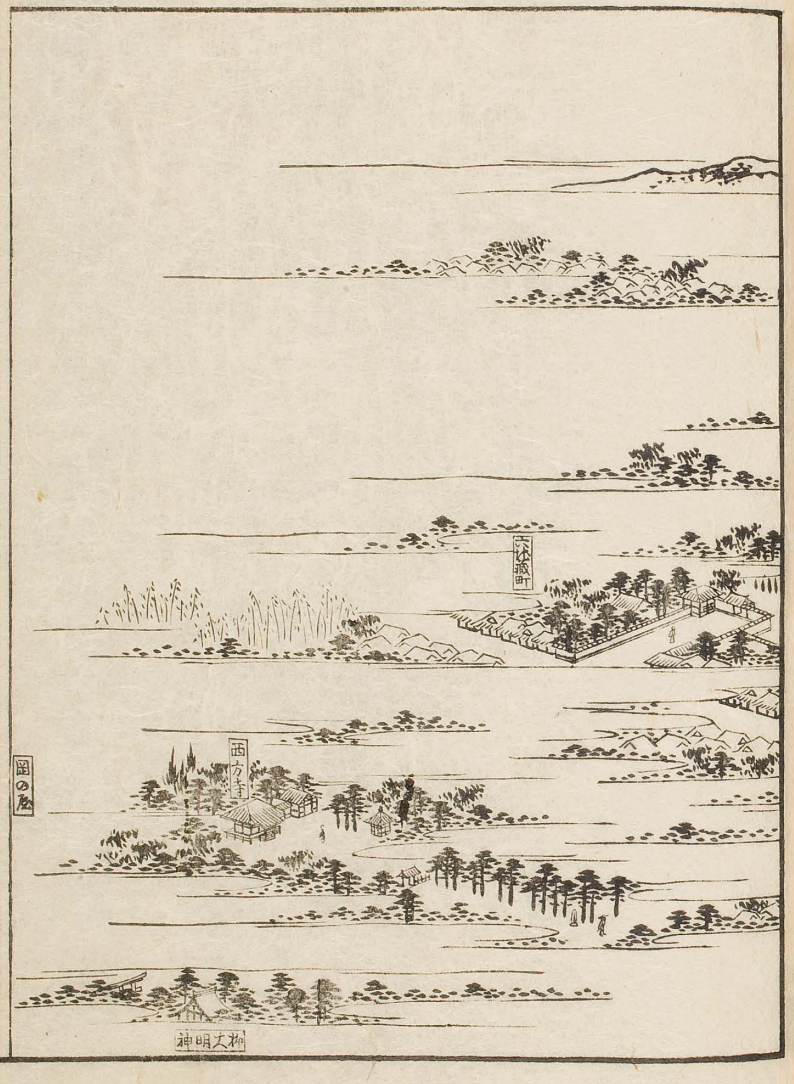
御香宮を城山の西にあり本社は神功皇后なる由地は御鎮坐ましまし給ふ年
歴詳なる文禄年中伏見の城といふ是なり一説に大亀谷の東
ふるゝ神祠はしく〻ゝ古の旧地に遷坐ありしと
九所堂初は九柱の神を祭る社頭も九基あり御香水鳥井も橋小あり山
水小あり〻〻〻賽石鳥居の内右の間小あり清人ありて賽祭る
所なり世人めでゝ名拝殿南の門伏見の城中にありし城門なり
京橋のゝ〻〻大坂より河水を引登る舟着あり夜は舟盗の出るを都小
通る高瀬舟宇治川なる茶舟やどりてやまびこ川辺は家は旅客
をもてなす鶯鳴て聲出て饗應をなす所の風儀なり
巨椋は入江は豊後橋の南向なり渺々なる水面なり土人小魚の中小大和街道
あり五十町は堤なり夏は蓮花河骨生じて炎暑を凌ぐの江なり
冬は水鳥ほくそ集れば漢猟をなす
抽ほくそ入江の月は沈よ光はたして蛍とぬなり　爲尹
巨椋はやし沈む入江の南小倉里は東にあり去日明神を祭る
七里の氏神なり　終は九月十日

指月山月橋院を豊後橋小瓜の東にあり毘沙門堂安置仏法大神社
化山地を洛陽般舟院と旧説あり
観音堂月橋院の西北にあり聖観音安置月見池
月見園指月の後山にあり二名宇治田原山秀吉山所に樓臺を
営て月を賞しめ給へば姑蘇城は宴たけなわなりしも鶴鴻荒んて
むかし秋怨ぶ銅雀臺小霧なるてしも西去げうして今林し山地と見
はるかむるしく照してむかしの変らず
六地蔵指月の東八町京街道なり南を芝縣と洛東なり
地蔵堂　本尊地蔵菩薩は仁壽二年小野皇
后の願ぶ生身は地蔵尊拝し願て後一木彫て六躰は地蔵
ときざみ當寺に安置保元年中小平清盛西光法師に命じて
都は入口毎に六角の堂建いとなみ山尊像を配して安置今の
地蔵巡りなれりとぞ


天池
むつの橋
指月
月見の池
月見の岡

佐賀
指月
豊後橋
大池
大倉社
小倉社
伊勢社
豊後橋

六地藏
本幡里
弥陀次郎旧跡



𣘺河橋は六地蔵町の中にあり此橋はいにしへの大和街道にして金が辻より五ヶ庄を経て宇治橋に出しむかしの街道なり今の小倉堤の街道は秀吉公の時造る　𣘺川の水源は北山科小関より流れて宇治川に落合ふ　上古は此辺にて𣘺川といふ所にありて勧修寺川小栗栖川ともいふ

新勅　都出てゝ遠しと思ふ夜半ならねど[illegible]𣘺川の辺　俊成

琴弾山は六地蔵の艮日野の西にあり　名義詳ならず

木幡里は六地蔵の南にあり瀕薬師不焼地蔵此里の東側にあり

拾遺　山城のこはたの里に馬はあれどかちよりぞ来る君を思へば　人丸

千載　衣駒をしとゞろかし山城のこはたの里にありと答へよ　俊頼

新後古　かち人の何ぬよそに待侘て木幡の里を夜ふかく行なり　為家

木幡山　六地蔵より北の今の佛國寺の辺をいふ木幡山と云ふ号にて北は源蔵を限り南は岡の屋五箇庄を限る今の六地蔵の町古の木幡里なり古人和歌に木幡をかち人と詠むは此里に馬をとゞむる人多くありしより云ふなり

新後拾　木幡山君がゆかくは駒よりもかちよりも急ぐ旅を思ひしは　高階宗成

木幡関は六地蔵の北城山の麓にありしに旧跡あり今関山といふ

新後拾　遠からぬ伏見の里の関守は木幡の山の君が通ひ路　家隆

柳大明神は木幡里にあり天忍骨尊を祭る　此里の産沙神とす例祭は九月十六日

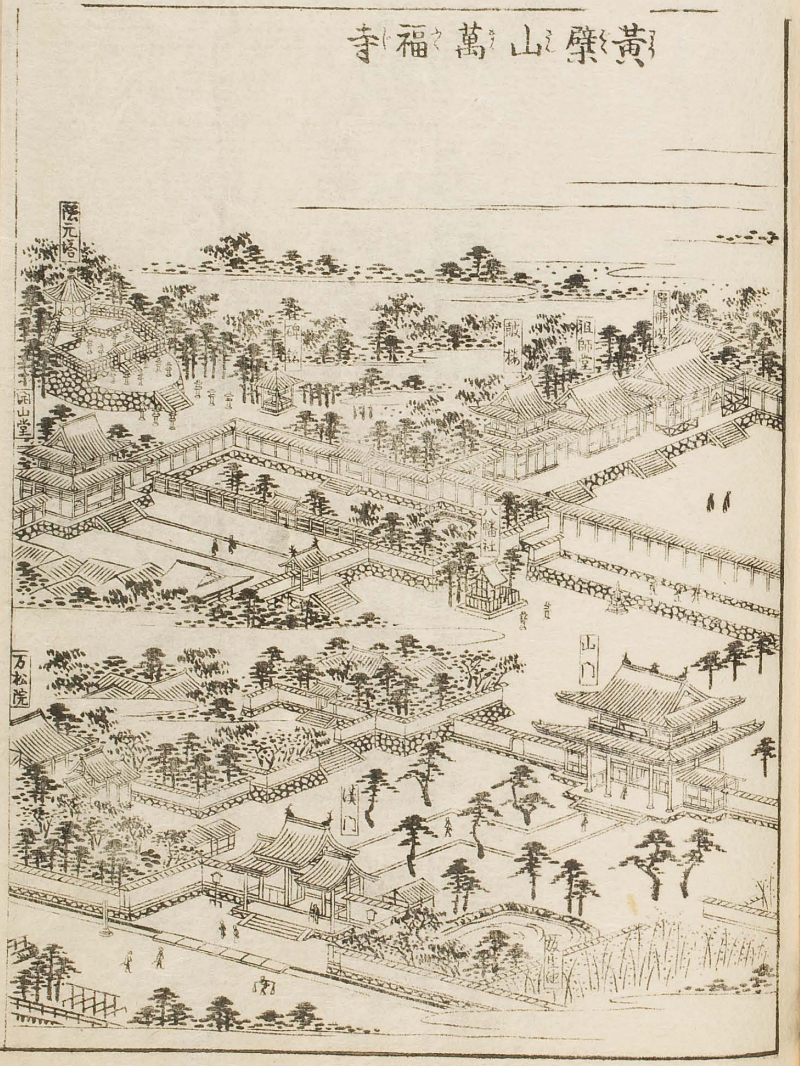
岡屋は木幡の西之宇治川の西にして民村あり古の御街道筋なり

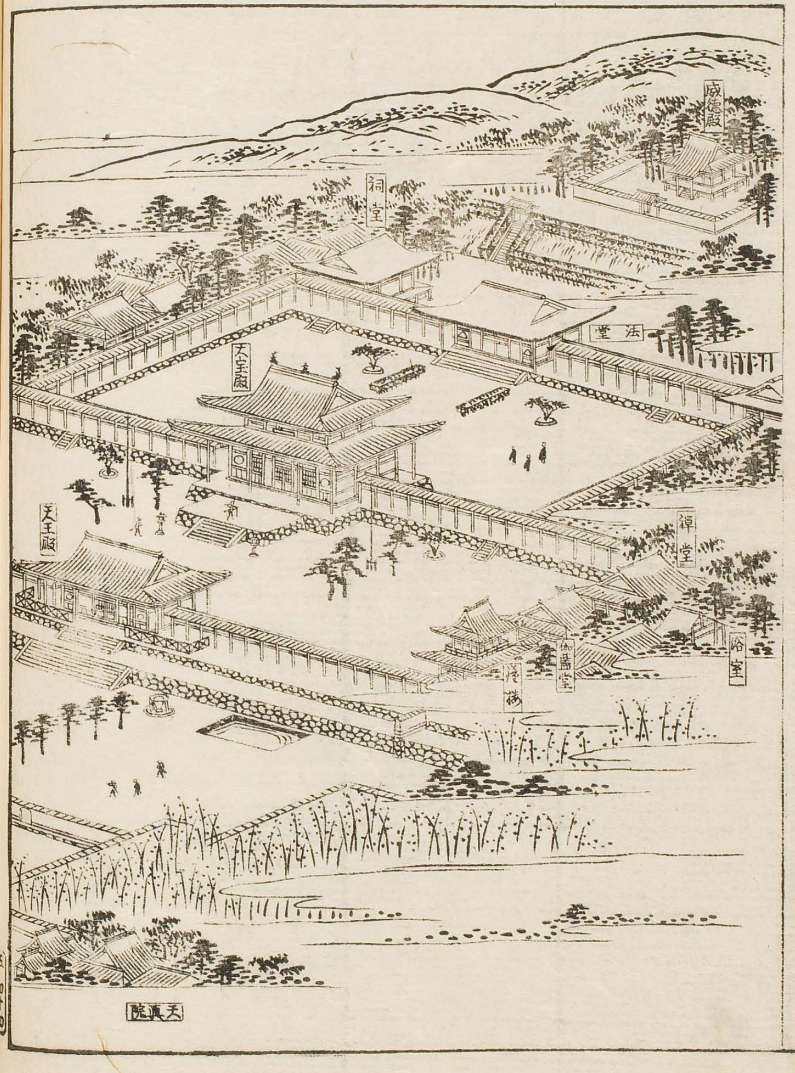
まま　日くれなば岡の屋にてや泊らん樵川の辺し　読人不知

長明方丈記に曰若此の白波に身をよする朝には岡の屋にゆきかふ舟をながめて満沙弥が風情をぬすみ桂の風の葉をならす夕には潯陽の江をおもひ遣りて源都督の行ひをならふ

西方寺　弥陀次郎の旧跡は五箇庄にあり本尊阿弥陀佛は金銅の立像也其来由は原に當國淀の東一口といふ所に弥陀次郎といふ漁人あり生業の殺生を好むに於て邪見放逸のものなり或時頭陀の僧壱人門戸に立悪次郎焼鉄を以て額に當て追放す僧少しも怒る色なくして帰る次郎怪で跡を慕ひ西山粟生の光明寺に入て見れば堂内の釈迦の像を拝すれば額に焼鉄の火印あり次郎忽懺悔の心を發して佛道に入是より御鉢の釈迦といふ今光明寺にあり　又ある夜霊夢を蒙りて淀川に網を入るに紫金の佛像を得たり　當寺の本尊是なり　其後當寺の常照阿闍梨に具に佛道を修行し遂に二人とも同日同時に往生し侍りぬ　紫雲来迎の名で弥陀次郎といふ

黄檗山萬福寺





黄檗山萬福寺は五箇庄れ南ふあり開山隱元和尚を大明福州福清の人ふして姓は林氏諱は隆琦字は隱元ゆり本朝承應三年ふ東渡し萬治二年公命ふよりて山城國宇治郡大和田れ勝地を卜て寛文元年九月より伽藍草創し精舍れ經營多くは異風玆模し名を黄檗と白十三年四月二日後水尾上皇より大光普照國師の號を賜へ

漢門 惣門 さうもん

宗徑 漢門の額 高泉の筆

義道重恢 漢門の柱聯 高泉の筆

聖を賢臣を仰ぐ 山門の軒 高泉の筆

苗檗山 山門二重屋根の間ふの額 隱元和尚の筆

山門 惣門 さうもん

祖席繁興天慶大 山門外柱聯 本菴の筆

地靈秋昌山川同芝聲 山門内柱聯 隱元の筆

福寺 隱元の筆

門庭顯煥日精華 山門の後 本菴の筆

門風弟福人を龍象任登瞻 隱元の筆

旃檀林 東向の額 千呆の筆

大道沒遮攝進步直登兜率殿 東向れ聯 千呆の筆

天王殿 天王殿の額 本菴の筆

法門多內外獻身投入旃檀林 東向れ聯 千呆の筆

天王殿 布袋和尚れ像を安ふ 金色ふり四天王の像 傷ふ安ふ

福地鍾靈特感四王護國 天王殿のうしろ かろ額ふり 即非の筆

慈門現瑞大放三金度人 天王殿れうしろ 東向ふろ額 即非の筆

威德殿 釋迦佛の坐像を安ふ

莊嚴 即非の筆

首冠兜率感應三洲功宰相 東向ふろ聯 千呆れ筆

加月核實拜護持正法德雜磨

大雄寶殿 釋迦堂の二重屋根れ聯 本菴の筆

大雄寶殿 釋迦堂の二重屋根れ聯 本菴の筆

法德堂 堂の額 本菴の筆

仰ぎそろ〳〵多 聯ふり 即非の筆

ぢぐ〳〵ろ人 聯ふり 即非の筆

碧小丹山設長生こと画 堂ふろ聯 高泉の筆

紅軒白月比多ぎこ燈 堂ふろ聯 高泉の筆

法堂 堂ふの額 本菴の筆

獅子 法堂の額を 乳費隱の筆

ぢぐ〳〵ろ人 堂ふの額を 費隱の筆

捧唱交馳國師千古猶生 堂ふろ聯 即非の筆

象教圓繞靈山一會儼然 堂ふろ聯 千呆の筆

威德殿 帝王れ 碑 安ふ

仁明昭日月 威德殿

威德殿

山河正氣 威德殿ふろ所れ ふ千呆の筆

祖師堂 達摩大師 金色の像 本菴の

祖師堂 堂ふ 本菴の筆

選佛場 知客 坐禪 安ふ

四河 坐禪堂

選佛場 坐禪堂の額 隱元の筆

碑堂 地藏尊 安ふ

大顧堂 堂れ 大聯の筆

伽藍堂 伽藍神の像 安ふ

伽藍堂 聯あれと 安ふ

食堂 本菴れ 奥煙版 安ふ

禪悅堂 食堂の額 本菴の筆

開山堂 隱元像 安ふ 後水尾院勅書れ額あり 繁ふろそ 暑ふ

開山堂 同堂の額 本菴の筆

丟 開山堂 聯ふり 即非の筆

壽藏 金泥の像 本菴の

天開壽藏 隱元生日

隱元碑銘 壽藏の前ふ建

舍利殿 開山堂の後のふあり後水尾院より 隱元和尚の塔ふろり 隱元の筆

地勝松風不老春

華厳室 釈迦仏を安す 節竿旗 大雄宝殿のおもに建る 万松閣 当山の荼毘所也 妙高峰 黄檗山の峰をいふ

五雲峰 妙高峰の南なり

明星山三室戸寺は黄檗の南大鳳寺の西にあり 本尊千手観音 八円浮

檀金の立像也 長八寸弐分 宇治山の東岩淵より出現し 西国十番の札所也

光仁天皇の御本願にして智証大師の開基 中興隆明法師

宇治山は三室戸山の南也 喜撰法師此所に住めりしとぞ

続拾 うぢ山のむかしの庵のあとみれば 尾上の松ぞ名にのこりける　法眼慶融

後撰 宇治山の紅葉をみずは長月の すぎゆく日をもしらずぞあらまし　ちかね女

喜撰嶽は三室戸より一里ばかり巽にして槇川村の上にあり 上に岩崛ありて是を喜撰洞といふ 此絶頂より喜撰法師雲に乗じて登天しぬと也 延阿が井蛙抄に喜撰が住家は三室のおく也といふ 長明無名抄に三室戸のおく廿余町ばかり山中へ入て宇治山の喜撰が住ける跡あり 家はなけれど堂の礎などさだかにあり これらかならず尋ねみるべき事也といへり 古今の序に宇治山の僧きせんはことばかすかにしてはじめをはりたしかならず いはゞ秋の月をみるに暁の雲にあへるがごとしと云々

都の巽宇治は里ハ
茶は名産にして
高貴は調進糸毛
の例ありて製法他
境ふれ〳〵びれ
山吹ちり卯の花
咲そむる頃茶摘
とて宇治里の乙女
の女白れ手拭を
いくぢを赤を前
ぐれを腰ふ纏
して茶園ふ入り
鋏ぬ〳〵しく
びくるを孤ひて
奥じくるあり
陸羽の茶経みち
書遺し伝

宇治里あるひは鬼道都より約程四里ばかりして宇治橋の東を宇治郡西を久世郡くむの應神天皇第五の親王鬼道推郎子ふ帝位をゆづりあるべく辭しまうさんに用居しめし宇治宮と号し兄大鷦鷯皇子ふ譲りあ給ふ父帝の勅るに依ふ郎へ兄ふ譲りあ給ふ間三年世間取り遂ふ宇治宮ふ崩じ給ふ兄の親王郎位しめ給ふ仁德天皇とゆ申そ又皇極天皇ハ大和國飛鳥宮より近江の比良宮ふ切幸るりて宇治里ふ一夜泊りなり給ふ尾花張りて菴ふ葺うせ初宮ふ成さし名ふ付ふ宇治都とゝ号ひ給ふる

新勅撰万葉あそらかりられ所ハあるなみのゆれ給ふる後拾遺

秋れ来ふ尾花ハりあるやとれり雲もむかりかりそふ　額田王

後千

おもひ侘びりの居さむに秋風のうちの都を長うるり　雅成

新撰古

さ廿迄ふ来ふ成りさひそよなりや長うられらんうられ里人　雅成

抑宇治の名産を氷魚鱸鱧鮎一名宇治丸圓樹茶磨風炉れ炭筆取り茶を本朝の極品ゆ〻て天下ふ名高く顧渚山の甘露ふも風風ふ

の龍焙ふ劣さ侍の寿あんむの梅尾の明恵上人種成異國より得ゆし脊振山ふ栽置てされを出石上茶と経名付けさりまより宇治の風土茶園ふ可るりとそふに栽初しめり

靖怜石ハ三室戸より宇治橋ふ至る乃ふあり石面二方ふ観音の像を彫

推ゲ本れ社ハ彼方の町ふ鎮坐し西面の座の観音ハ七尺ふあり浮舟宮を宇治の小波戸と云ふ所ふありて橋姫爰のうたゝ〻ハ川の西ふ立られハ源氏宇治十帖れ立ちあり

いかゝ〻より名産くちとハの勅撰に浮舟の君本玉ふ立られくふ年浮れ

うゝろの本の下ふ捨られあるいうゝそくらもあひて薫大將推ゲ本れ空

しき座成うゝ中の君れ〻び成れて山のあさうみまつるせるとかゝる

も皆山ゆ〻名蹟ふそ物換り星うりてむのゝと慕られ侍

宇治川水源ハ琵琶湖ゆ〻てつゝに滔々とゆ〻れ石山瀬成經て山成

めぐり巖に觸れて宇治ふ落淀川ふ入ひ向ふ鹿飛来ゝるとゝ人所あり

新古

その成のやそうち河のあろ本ふいさゝの波れ川墨ふ流れも　人丸

千載 朝朗宇治の川霧絶くまなき網代の木　定頼

新古 夢とのみ春の濃き霧ふかくなりぬ宇治の網代木　寂蓮

後拾 ゆく瀬を融大臣の別荘あとの川岸に歌を多く載せ侍りける

花の色の移ろはぬ水さえ分の中も白くなりにけり　定家

新拾 ちりそめし歌冬の暮れ花さかぬ宇治の老木　西園寺相国

播小嶋崎 宇治橋七川下流町ふ有りと

平家物語曰平等院の長橋の小嶋崎

武者二騎引かけ〳〵出来り一騎は梶原源太景季一騎は佐々木四郎高綱うち人目みは〳〵ゝ〳〵さうろうれども内々先きをかけんとのりけるうち梶原は佐々木五段ばかりぞ進んだる佐々木如何は梶原取て河は西国一の大河ぞや腹帯切て見ばやと鎧のくつをはづしかれて梶原は馬れゆがくに捨て九寸の太刀を抜て馬の腹を射通し腹帯を解てで鎧をうちぬき

後拾 宇治の小嶋ら流れ寄る水の八十うちの人の網さし船　光俊

袖の香も花ぞあらん播の小嶋あはれ千年のうら舟　左上皇

源氏物語 無数の宮宇治よりて法ちうふちうの人の家に西阿座の宮殿りて行て

くひでの舟のうの人帝供の人をまれうん播の小嶋とやて供あるし

さくあれはかれんの人びとも多くもろべ舟のうさ殿なるうらにて兵部卿

宮ふくるれんあるの播れ小嶋ら流れよちうちうちうの流れ

女とも乙〳〵しるのゆうよろひてありまの夫

播のこ嶋のうのうりめ殿はりあて行あまうしまめ

宇治
興聖寺
恵心院
離宮
八幡

観音堂
朝日山

宇治橋を孝徳天皇の御宇大化二年に元興寺の道昭和尚が橋架かけ初しゝ
いにしへ橋足より西にあり明衡往来に東より望ハ
橋小島崎西に顧ハ宇治の長橋えゝ
三山日水と城の名水なり瀬田の橋下龍宮より涌出る水此所へ流れるなりと又一説
みなを作せ給ふ天の社壇の下より流出るとて秀吉公伏見城の時宇治へ汲しめ給ふ
通圓が茶屋橋のもとの瓜小あり古へより此所の人茶屋調て茶を売
南へ茶店ハ通圓が傳あり むかしより宇治橋掛替のゝれハ
此家も公勢に沙汰し造りあり
橋寺を通圓ゝ宇治の常光寺放生院と号に本尊地蔵菩薩開基ハ
道昭和尚と其後興聖菩薩とゝ橋供養しゝ
離宮八幡宮を橋寺の南にあり祭神を座して上の社ハ應神天皇仁徳天皇
下の社ハ兎道の尊祭なり 足平等院の鎮守宇治郷の産土神なり
神輿三基 例祭ハ五月八日
叔社を當社のかまあり離宮社橋社あり 離宮と号ゝ此地を宇治郡
當社の神ハ武内宿禰平忠文が霊 あるゝ自綬の称号こゝ一説ハ
伊予国平家三年三月平將門征伐して秀郷貞盛忠文等將軍ゝ
ゆへあるく將門叔父ゝ 勅賞のさくあるゝ
ゝ此ゝ賞のうくハしきとハ
其沙汰ゝ 忠文が

甲まで遷りて血を吐き絶えたり斷食して死なり墓まで悪霊と成りさまたげ崇る
離宮明神と崇め後冷泉院の御宇
治暦二年十月七日正二位をさづけたり
朝日山を離宮の後山と云ふ鬼道尊陵朝日観音山と脇
朝日山はとけとけたまのくきまり八十うち人もちなる搖し　寄家
あさ日山まさに法くらに照よ芳れりうちは代本つ　資明
朝日山惠心院は離宮れ南にあり真言宗にして開基を惠心僧都と本尊大日如来
弘法大師の作某師堂れ安置の像も同作之惠心僧都七十六才の像堂内に安置
本堂の額惠心院　持明院基時卿の筆之開基源信僧都は和州葛木郡の人
にして姓を清原氏之叡山義真法師に入室れ教をよくきもの一家要
訣往生要集阿弥陀經疏大乗對倶舎抄曰明相違等を著し惠心院の
僧都と称す大唐南湖知禮法師に問書を送りたりしに大に感歎し答
釋たりて五ヶ条寛仁元年六月十日徒弟を召あつめて遺戒の
ありしも教我の疑を解べしとそ思ひ遺戒

さけ上足度祐法師等人を召とめて其法を授をしげ小々法
あ七十六才
あ大乗空ふ乗を奇香ふ乗ぬ山中れ物本ぐく西ふ乗
胡宋皇帝僧都れ道譽なして法眼位を授給
新古
我ぞふもゆの極ふ乗むれ乗ぬ乗ぬ皆むりて　僧都源信
佛德山興聖禅寺惠心院の南に隣る曹洞宗にして開基は道元和尚之佛殿
又釋迦佛を安置の額興聖寶林禅寺　青蓮院尊純法親王の筆に當寺にて
源州里ふあり　今墨染の南伏見寺の境内にあるの由也
正保年中万安和尚中興して諸堂を造
城主永井直政は建立ありしなり　おすてを琴ノ坂とひたなる橋ふ架さうて
山腹を透垣にして約日山腹を中ふとり白槙を接ては法虎をにとり姫鄭躅
又とくれて宇治の川瀬れ舞央と鈴に伝ふ法聽て龍れ室ふ入森を敵て
虎の堂ふ移りて山禅利のたてとるべし
山吹や宇治は焙炉の白ふ灰　芭蕉
観流亭　岸の上の禅院　亀石　中宿芝
観流亭の汀ふあり　形亀に似たり　惠心院下岸のふあり

家集
鳥羽院の
御面影ふ
江上蛍を
とる歌
よみ給ひ

いさわたれ
蛍の
ともし
ちゝ
玉江の
芦
みな
葉そ
ちる

源之位枝政

槇嶋は宇治橋より乾八町ばかりにあり　宇治橋より豊後橋まで凡五十町の堤あり名を槇堤といふ此間に槇嶋村上嶋下嶋等の民村あり又上嶋より巨椋への舟わたしあり是を槇嶋の渡といふ

金葉
宇治川の川瀬もみえぬ夕霧に槇の嶋人舟よばふなり　基光

新勅
河風に夜さむの衣うちとさん月に出てあらん槇乃嶋人　為道

橋姫の社は宇治橋の西詰にあり　古へは二社あり一社は洪水のとき漂流す今礎存せり

古今
さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらんうちの橋姫　讀人しらず

此社の評説をとりて祭る神を考ふるに袖中抄には住吉大明神橋姫の神にかよひ詠るなりとぞ清輔の説には山の神と橋の神と橋の守の姫と佐保姫龍田姫などにおなじ旧妻を橋姫にたとへたり一条禅閤の御説には離宮の神夜毎に通ひ給ふとて暁毎にあびさしく浪の音高きとなん玄恵法印の曰く嵯峨天皇の御宇にある女貴船の社に詣で七夜丑の時参りして河瀬に髪をみだし悪鬼と化す是を橋姫といへり宗祇の説にはかくしたる妻をまたれて嘆きまするにかれも我をまつらんと姫は妻なり

よそへてかくいへる儀なりし又源氏物語に橋姫の巻あり是は宇治のことありさまに付てさまざまの説あれども其沙汰なし定家卿も宜ひたまはぬ道遥院殿の御説も清輔宗祇の以て所に同じ佐保姫龍田姫橋姫三社の姫といふて源氏口授のあらましを道の師にうけてかくなむ

新古
あじろ木にいざよふ浪の音ふけてひとりや寝ぬる宇治の橋姫　慈圓

新千
橋姫のそでや錦とこゆるらん紅葉はさらにうちの河波　後宇多院

浮舟嶋は橋より弐町ばかり川上にあり　弘安九年興正菩薩橋供養のとき高さ五丈十三重の石塔婆を建つ近年洪水に漂流す

新拾
それとなく宇治の川長おとすなる浮みもうき人ありやと　頼康

鵜飼瀬は浮舟嶋より半町ばかり南をいふ

うかひ舟あはれとぞ見るもののふのやそうぢ川の夕やみの空　慈圓

槇尾山は橋より南にして北に向へる山をいふ　土人丸山といふ

新後撰
まきのをもたれかみるらん花さかぬ槇のをはれぬ朝乃空　雅經

玉葉
あさぎりに橋の中山ふもとこめて宇治の川長舟よばふなり　土御門内大臣

平等院

続後撰

河風ふ
きあれて
月の
さやけさ
八十うち
人も
あらじ
ありあけ

定家

平等院を宇治橋の南にあり初は河原左大臣融公の別荘なり其後陽成院此地に行宮成建られ宇治院と号し又承平御門も榮華の所と遊猟し給ふ
李部王記に久しくなりて六條左大臣雅信公の所領となりしが長徳四年頃
御堂関白山院を淨土荘とし遊覧の地とせり其後子息宇治関白頼通
公永承七年ふ寺あして平等院と号し法華三昧を修せむ 河海抄の大意
佛殿は鳳凰成象を左右の高楼回廊を両翼とし後背の廊成尾とし棟の上に
雌雄の鳳凰あり 金銅を以て造る 風に向ひて舞故に鳳凰堂と云
本尊阿弥陀佛は長六丈の坐像にして定朝の作堂内の長押に廿五菩薩の
像あり四壁及三方の唐戸は浄土九品の相を画繪師の長者爲成の筆上
に白紙形ありて観経の文を書き中納言俊房卿筆なり天蓋瓔珞等も七
寶を鏤古代の作物にして美麗荘厳作なり
鳳凰堂は永承年中
賴通公建立
曾て回禄の災あり 鉤殿観音堂を最勝院と号し本尊十一面観音を立
南方の奇観なり
南方の奇観なり
鉤殿は所宇治院の
鉤殿を建し
所なり
鉤殿
像にして長日の作なり此藏尊不動明王を左右にして脇壇に安置し

扇堂を源三位頼政治承四年五月廿六日に所にあらずして自
殺せし 妻は平家 駒繋松 頼政馬をつなぎし所なり 鎧懸松 頼政鎧をかけし所なり 阿字池
鳳凰堂のめぐりにあり 鐘楼 鐘を龍宮より上り園城寺の 阿弥陀水
恵心僧都の作なり 法華水 法華家方丈の名 楼門の
橋の下流の作なり 楼門の
六字の名号の石塔を建 焼失の後形を遺し
抑當院を太台浄土の二流ありて台家は三井寺を屬し寺勢を圓満
院御門跡浄家を宇治関白の菩提所にして心誓上人より世々浄土
宗成て當院成守る 方丈は頼政の彩画及び畫像あり
金華集 うちは平お院のきさきにまりてうちは後白
ひとのかのうくをうがありてうちは後白
宇治川の庵のうちにかくれてうちは恵心
宇治別業 宇治関白頼通公の別宅を平等院のうしろ西の方方四町ばかり
名所 今所の家とおりて池殿 岩橋 御園 作倉町 公文所等の
呼人
遺後雑 宇治に住りける比詠
人のとやとのはのしるる
里なれぬ山かつきにかくれて宮古の人まつるるもぬ
宇治業関白
太政大臣

侍中群要に山城国
宇治の御網代より
日毎に鮎魚を進る
とあれバ今も今を
代例あつて将軍の
家へ鮎汲上て平等
院より十町ばかり
川上槙川のほとりの
かくりみて今の叢
の肩よきさも居て
早瀬を汲ての鮎を
汲上ぐ興の一参
しれ李白の詩に
鸕鷀杓と慕をと
とも此この名を
換へられぞかし

又氷魚をとりて
毎年九月より
十二月まで之を
貢ぐ花鳥餘
情にいへり

拾遺
数ならぬ　身は
うち川の　網代木に
おほくの　ひをも
過しつるかな
読人しらず

宇治田原名村
煮栗焼栗林

宇治川
鹿瀬

栗林

八幡宮

天武帝住

名村

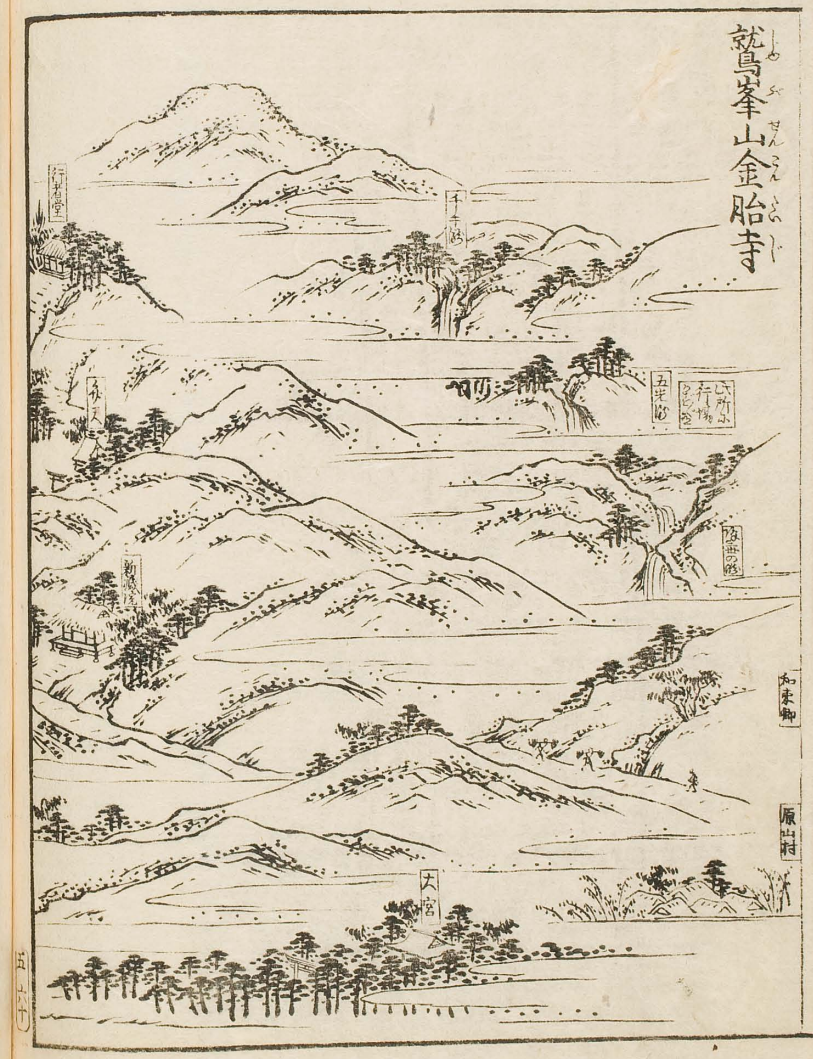
御の口

御廟

縣の社を平等院の後西門れ辺の傍ふあり祭の所ハ弓削道鏡の墨ゐるとを一説ニハ
宇治れ悪左府をふ〳〵もの人 保元物語ニ曰宇治左大臣頼長卿ハ知足院禅閤殿下の三男なり 信西を師〳〵て常ニ学窓ニあり仁義礼智信を正〳〵賞詩
勲功を捌政務ふきり〳〵をしゐて上下の例条を五月五日夜祈禱一基あり
金色院白山権現を白川村ふあり 平等院より十八町南なり 開基を昭澄上人ハ里人孝海祈
とゝ祭を九月十八日ニ
宇治田原ハ平等院より凡五十町南ゐて左宇治川右を山嶽巍々より峰遠
峰〳〵ゐ〳〵れ公栗子山越ゐの人 近年峰をゐ〳〵た岸ふゐ〳〵ゐ稼て遠ふ爰〳〵
まで公舟やりて薪を運送ゐ是より 田原郷を四面みな山ゐして中ニ数村あり
南を牛馬の往来自由なり
郷口〳〵ゐ山ふの方郷中の入口なり
大宮明神を郷口の長ふあり 山郷内ハ産土神ニハ 九月九日祈禱一基あり 所未詳なり
田原親王ハ神廟ハ大宮れ南ふあり光仁帝の御代ふゐて施基皇子と号ニ
猿丸太夫田辺を田原郷禅定寺村のゑ〳〵奥山田ふあり 山地山嶺屈曲ゐて比叡ニ
近江の風物ありて山戸塚村ハ出〳〵ゐれを猿丸峠〳〵ゐ人方丈記ニ栗津の辺ニ山嶺
禅九公羽〳〵ゐを〳〵ゐ田〳〵ゐを〳〵ゐて猿丸太夫墓ふゐぬをゐ〳〵ゐ山所をゐ〳〵

煎茶焼栗林ハ田原郷内名村ふあり むゐ〳〵 保元ニ天皇ハ世変ふゐ避て吉野ニゐ
居〳〵ゐ人時大友皇子殺ふゐ狭く 壬申の乱ニ天皇まゐ〳〵ゐ山所ふゐ〳〵ゐ
里人怪みゐ〳〵ゐけゐ〳〵ゐ是人〳〵ゐ〳〵ゐ槻ニ栗ふゐ〳〵ゐ又煎ふゐ〳〵ゐ上〳〵ゐ天皇
ゐれ公ゐ〳〵ゐて我〳〵ゐ〳〵ゐ生出〳〵ゐ長〳〵ゐて庁ふゐ〳〵ゐ埋ゐ〳〵ゐ里人
不思議ふゐ〳〵ゐ帝ふゐ〳〵ゐを逐ゐ大友王子ゐ〳〵ゐ山ふゐ自合戦ふ敗〳〵ゐ自害ゐ〳〵ゐあれ
ゐて吉野王子位ふ即ゐれ公天武天皇ゐ孫ニ栗櫛沢茅ふ繁茂〳〵ゐ凡方四町の栗林
とゐ〳〵ゐれゐ帝栗櫛ふ山焼〳〵ゐ如く煎〳〵ゐ如く栗今ニ生ゐて当世七不思議の其一ニ
天皇賓祚を継ゐ全端〳〵ゐて今ゐ毎年禁裏貢上ゐ〳〵 調進の時都ニ公卿ゐ〳〵ゐ賞ゐ〳〵ゐ生後
禁裏ハ入禁制の高札を林の入口ふあり
八幡宮を栗林の東ふあり 田原郷中一の宮ゐ号ニ公ゐの 天武天皇社 八幡宮の
氏神ゐて奉ふ九月廿六日ふあり
信西塚 大道寺村通の傍ふあり 山所より鷲峯山ニ至ゐるりお納言信西入道ゐ右場ニ督信
頼ゐ為ニ殿ふ〳〵ゐ抜ゐ山里ニ来ゐて土中ニ埋ゐ自埋ゐ〳〵ゐ所ふ敵勢近ゐ
ゐの首を斬ゐ〳〵ゐ上ゐ〳〵ゐ保元物語ニ曰信西ハ蟹水ニ面ふゐ〳〵ゐ
さの酢鮒の如ゐ〳〵ゐ空ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ相ゐ〳〵ゐ宿ゐ〳〵ゐ無ゐ〳〵ゐ
所前ニ相ゐ〳〵ゐ行ゐ今ふ信西ハ見て相〳〵ゐ日ふ〳〵ゐ〳〵ゐ道の如ゐ〳〵ゐ
ゐ〳〵ゐ命を惜ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ相〳〵ゐ
大道寺田辺を大道寺村ふあり 今草堂ニ〳〵ゐ安置ニ
山所鷲峯山の麓なり

鷲峯山金胎寺



就鷲峯山金胎寺を和束郷内ふ山村の巓ふわり　宇治田原郷ゆり一里ま大道寺村ゆり一町毎ゆ標石あり　世六町ゆり一武

天皇の御宇白鳳四年九月ゆ役優婆塞ゆ山ゆ登り天皇の霊験ゆ山ゆ入りし

八の嶺ハ八葉ゆ蓮華ゆ表し釋迦嶽阿弥陀嶽弥勒嶽寶生嶽阿閦嶽

虚空藏嶽不空嶽妓楽嶽と號し巖頭ゆ坐して修法とりゆ五七日ゆり

是當山の開基ゆ其後元正帝ゆ御宇養老六年ゆ越の白山の行者泰澄法師

役芳沙ゆ暮ゆて登山し七堂伽藍ゆ造営ゆ　後世ゆ及んで其盛し今

宗旨ゆ真言ゆて本堂ゆ弥勒佛を本尊ゆ　行基の多寶塔ゆ愛染明王ゆ安

置ゆ　伏見院の御建立ゆて往年の御　開山堂自作役行者像ゆ安置ゆ　侍ゆ前鬼

行宮の旧ゆ虚空藏嶽ゆあり　後鬼あり　金剛童子

社　當山の鎮守ゆ石ゆハ日本金柱福滿權現八幡宮金剛童子を勧請ゆ空鉢峯ハ

當山の絶頂ゆり寶笈印塔を遷る是北斗星ゆ所ゆ泰澄法師ゆ所ゆて修

法の時石上ゆ坐しゆり虚空ゆ鉢を投ゆり貧鉢雲中ゆ飛施ゆの米穀を入ゆ

帰ゆる泰澄入寂の後鉢ゆ埋て空鉢峰とゆりけり　世の変ゆり四八山所

當山東ゆ山脇を役行者泰澄の二師密法修行の霊嶽ゆり　鳴動　和州金峯山ゆ準し

登山の事世俗ゆ巡

降三世瀧　鐘懸　胎内潛　登岩

仙人窟　石塔岩　舍利石　佛岩　水晶山　熊倉

黒白岩　安住岩　天狗岩　亀石　兜率瀧　老瀧

加持水　馬足洗水　蓑生芝

柳山ゆ城の高山ゆて山ゆ方ハ帝城繞圍ゆ山ゆ

中ゆも北嶽愛宕石の山領高く聳ゆ方ゆ琵琶湖の漫々ゆ水面

雲ゆ連ゆ三上境の翠巒を旭ゆ鮮ゆり子千のゆくを志貴生

駒金剛山葛天ゆを西海の海原無庫の洲崎湧ゆ見れ

ゆ麻耶六甲山の高根も只山頭ゆり一眼の中ゆ瘦りて雙眸

の客と成りぬ衆山ゆ秀て巖頭嶮々ゆして撫夫も涙ゆ出ゆ

老杉繁茂しゆて白日ゆ埋んゆ閉し李白ゆ大姥の吟ゆ五嶽を支

し天台の四萬八千よもゆん相對ゆ

百丈石
文殊石

百丈山大智寺
佛殿
留舟村

百丈山大智寺を和東郷湯舟村奥小松村にあり　鷲峰山の麓にして郷口より山田谷越て湯舟
禅寺にして江州に上　開山大觀禅師諱理有字は大有奥州金家の子なり出誕
永保寺に屬と　なり不言にして六載にして始て語て曰われ是良辨之父母大に喜て出家
と為せり諸の知識に謁して經論に曉し壯年の時近州甲賀に住し常に
和州安倍文殊に尊信し参詣して志願を企し湯舟村に至るに抽木の聳君の
家に入て茶を喫して憩ふに夢の日當山に水の佳境ありと告る師則招
實に夢に推りて今の山に登り巖上に坐禅すること一千日なりしが射側の巖に
さけて文殊菩薩出現し空中に在ること暫にして去師大に歡喜して岩頭
を下り殘樁の中に小松通に時好て茅屋を結ぶ事数千年にして林と為る今
小松村の樁木是れ其後に所立宇を建立して文殊の像を安し
百丈山大智寺と號す本願を山名伯耆守なり　開山を明徳二年十二月
十六日化と四十歳　勅諡を
大觀禅師と號す　当二世は大機禅師又中興　如雪文叢
和尚を東福門院仏殿再建しとなり
佛殿の本尊釋迦佛を安阿弥の作なり方丈に文殊の像を後水尾院の牌を奉安

坐禅石　方丈の西にして十町縁にあり高さ三十間横幅二十間頂上の平方十間なり
岩面壁　昔禅師一千日坐禅の所なり
文殊岩　岩面に白色にして布の如くあり　布引石　引し如くあり　大皷岩
形大鼓に

久世鷺坂　宇治田原の西にして所々に小和街道にして久世村を
慶長　新田の南にあり
白石は鷺坂山の松ばかりにゆるる夜も更ぬるなり　人麿
家集
今日そみるけ鷺坂山の白ゆきはしいそ佐保姫染おしなん　源三位頼政
椎尾山光明寺を長池の西に建る寺村にあり本尊十一面観世音約基大士の作
道の辺にあり其所に椎尾山と云
曲れて社は観音堂の南にして東の山本にあり所に高倉宮の御曹司　宇治に
敗れしゆへ曹の家にして家に納し所を崇あり故に非殿に遊り
此所の産土神にして八月三日なり　此所は和街道の驛にして人家多し表吉にのこれるを
玉水里は長池の南一里余なり　此所は古の道にあるにて井堤里と通りしと
玉水井を里の小道に横ふあり　横法兄公の愛しゆ玉水の井を井堤の里玉水の
水こと井は里の名よりて後世に準へつるとぞ
山吹を咲うて娃を水の底　鬼貫

井堤山
毘沙門
玉井
井堤尼寺の旧地
石垣村
井山の里
玉川

玉水
井堤尼寺旧跡
玉井寺
玉水
玉水七里

玉井寺ハ井堤里の中水無村にあり宗旨ハ真言律にして本尊ハ聖観音を安置す
開基ハ覺音阿闍梨なり庭中に玉井蛙塚あり

伊勢物語　むかし男ちぎれることあやまれる人に

山城のゐての玉みづ手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

新古今　延喜十三年亭子院歌合に

足曳の山ぶきの花ちりにけり井手のかはづハ今やなくらん　興風

井堤里を玉水ハ宿の名のごとし井堤左大臣橘諸兄公の旧跡を此里の南に石垣村といふあり此所の名の上村の山本にあり岩の松中池ハむかしの泉なれ又井跡みして今ハ田の字となりぬ昔紅の藤ありて其残苗今此地にあり又井手の蛙をきくに限りて色ハすこし黒きやうにて形ハいと大きくにもあらず外よの常の蛙のやうに踊りありくも侍らず常に水に住て夜更る程ぞ鳴けれこれハいみじう心も清て物哀なる聲にぞ侍りける　無名抄　意取

後撰

かくれぬに忍びわびぬる我身かな井手の蛙と成やしなまし　忠房

玉川　一名井堤川ともいふ六玉川の其一なり　水上ハ井堤里の東二里ばかり和束といふ所より流れて井手の里坂西玉水里坂西へながれ木津川に落入る左大臣山吹を愛しおひて玉川の汀に多く植させ給ひける〈今其堤を御溝裏といふ〉花の輪ハ小盃ほど大さにて幾重もめぐる事なりて花の盛ハ黄金の堤のごとく比類なきハ他所に又なく侍りし　無名抄　意取

古今

山吹ハあやなくさきそ花見んとうゑけん君かこよひこなくに

延五抄曰此哥ハ左大臣の大臣橘公ハ山城の井手の寺光明寺を建立して山水に山吹を植られけり其時高向の迦留大臣此山吹を来て見んと約束して不来時に贈り合せ今の井堤左大臣玉水其旧跡なりと云云

同

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

これハある人のいはく此哥のきよくものがたりに清友ハ橘諸兄公の男なり色葉集曰井堤の山吹といふハ橘諸兄井堤寺を造りて金堂四面の回廊のめぐりに山吹をうへて廊のうちなる水に影をうつして見るに世にかはりて見る事うるはしくありて供養の日にはざりけれ後には茶して身はかりなれたる花ハ此川にてやみぬるをとりあるべきと又維清抄曰諸兄公の宣ふハ我一期の後ハ此山吹を此玉水へ来て見んとぞ

新古

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川　俊成

続古

玉川のきしの山吹影見えて色なる浪に蛙なくなり　後鳥羽院

新拾

かはづ鳴井手の小川の水清ミ底にそうつる岸の山吹　師頼

岩橋　橋なし　むかし玉川にかゝりける

家集

かけひきし井手の岩橋たえぬともなほもさかりに咲ける山吹　教季

地獄谷
綺原社

綺田蟹滿寺
高倉宮社
光明山
高倉宮
蟹滿寺

ねて井堤の玉川ハ
名所六つ玉川の
内一ツ也
たゞ六位諸兄公
此所の辺ふ茶靡
ゆゑ
ふく柚のひし
より八重一重
咲ぬれあれ面
ふ映し大金盃を
つゝ〇〇〇ゆふ
あん見くらべ

拾玉集
玉川を
井堤のゐの風
花ぞ
ちるとも
なしく
山吹の花
慈鎮
玉葉
いさゝ
井てのゐ
ゆめ
あふせ
玉ゐの
俊成

高倉宮亜廟を玉水社南鳥居村のほとりに後白川院第二の皇子茂仁親王之落三条高倉
ふ御殿ありしゆへ高倉宮と称ス　平家物語曰宮ハ南都へ落させ給ふと聞て混甲四五百騎鞭
をあて合せて追かけ奉る案の如く宮ハ三十騎ばかりにて落させ
給ふ所を光明山の鳥居れ前にて追つめ奉る南のほうに対ス奉れば何をか矢ごろを
もとめて宮のたの御側後ろにかれハ御馬より落させ給ひて御頸をとられ給ひ
光明山寺四方　多居村の南綺田の北嶽谷　綺田のほとり
あり　云ふ山とあり
普門山蟹満寺ハ綺田村にあり真言宗にして本尊ハ釋迦仏を安置　紫銅の坐像　当寺傳
長八尺ニ
記に曰むかし此郷人常に至善にして佛のたふとき事あり女子人をもちて幼なき
普門品を誦して意楽ふかく日田面に遊びしかるに村人蟹をとりて殺さんとしかるに
累々として放りかへり真に耕せんとせかるに蛇の墓と呑てありしを打放さんとすれども放
さるれども放ども安のいまに真墓を放ちかへハ拔女を嫁して聟にとらんといひしかれハ
蛇ぬしが教をうけて呑けるを墓を吐出数の中にて這入ぬ家に帰て悔くるとも
甲斐なし真夜初更の後衣冠の人入来り今朝の約束ふたりて来りしとい人
いまく淺間敷ひてかのとりつめたるく今ハ自を注て来るべしとひとれ紛
帰りぬ女ハ後ハ一の室をとりて閉て普門品を誦して隠れ居りぬ衣冠の人

三日ばかりして来りて戸をたたく此の地の欣とおもひ女の隠れる室を巡りて尾を以て真門を
ふるふ毎に尾を叩て大小五六を夜ふるに至りて百千の蟹群来り地を散ふ殺斬
く蟹をとり来るくおもひ室内を通夜普門品を誦して他念なし時に衣冠長八尺ばかりなる
親有現ありて海辺をうかがひ常に擁護せしと真に父母ハ捨て女子を捨てあく則
土を穿地を埋て真地寺を営み真福を厲蟹満寺と号しかるに一名紙幡寺
梶原社　綺田村西にあり梶原平二景時の霊ぬりし所　梶原平二景時の霊ぬりし所　一説ハ延喜式の
綺原の社是なりと云ふ　健御那大荒神　建仁年間ハ九月三日
涌の杜　杜大木多くありて涌出社　神ぬりし所　和伎坐天乃夫之貴神　涌出中の人
林中森々　金剛蔵院　綺田の西の方中にあり　所伊別上神の往還路なり　真言宗にして
北吉野神童寺　号を　神童寺と称ス
本尊ハ蔵王権現立像長八尺ばかり　当山傳記に曰金精明神神童と現し役行者と
共に仏ハ尊像を開山堂にハ役行者の像を安置ス四十二丈の御姿ハ仏ハ
子守勝手の両社金精明神の社ハ本堂の東二町ばかりにあり後に神振ぶ
祢ぶハ昔和州吉野山に毒地ありて登山の人を悩ス故に笠置山と金峯と当山を
吉野山に准して系指せり　当所の人家ハ多くむかしの坊舎の名あり例祭ハ三月十日ク

北吉野
神童寺

新
洌恩菴
天神森
天神宮
六坊
六坊
天神宮

八條宮
佛殿
昭室
方丈

妙勝禅寺は本津川の西薪村にあり酬恩庵禅寺と号に禅宗にして開基は大應國師正應年中
に創し又一休和尚康正の比に再興し佛殿仏を安置し開山堂に
大應國師の像を安置し方丈には一休和尚の像を安置ねはの時自らのみて作りしむ
酬恩庵の額方丈に掲ぐ一休の筆一休の塔は遺骨を藏む又常に携へし笑杖あり
方丈の庭は佐川田喜右の好む所なり八幡宮宮里の西一町にあり此所の地主神
佐川田喜右の旧宅あり又像を此人の古墳あり
神南備山薪村の西にあり峯に天神社薪村の南に天神宮天神社の西の塔に
水晶石あり
天満天神と云山里の産土神普賢寺溪天神の杜の巽にあり何列
牧方へ出るあり
綴喜郡普賢寺溪の巽にあり方二町にして南に山にあり むかし継體天皇の
皇居なり遷されし所とぞ今都谷と云山里原和名抄に泉
長月のはつかの日の杜にまつりしあるをりをる家式
やのそまつるの里ふき夢に見てもるぬ白菊は
段々良不動堂都谷の山上にあり本尊は十一面観音にて安置
弘法大師の作と
牛頭天王社普賢寺谷の山上にあり山里の若王寺下物にあり本尊は阿弥陀佛は春日仏
若王寺の社本堂の前にあり

後鳥羽院
行家
後嵯峨
行基

藏開山若王寺の西に祝園下物の南にあり神武天皇の御時土師祝園の南にあり山里
本津川一名泉川と云河源は日泉川と云ふ本津川と云ふ所あり逆臣長髓彦を亡しし所なり
本津川は源を京師の北に発し泉川と共に古来より西義門の水源にして
伊賀山田郡阿知と云所より出伊賀半ばの水山川に流れ流れて本津川の水源に
雨ふれば晴天の日ふるも東風つよく吹くに山川は満水して堤を浸し白波常に高く立て門
の前を向布施巻きかるめくる
月毛も及のよりつる泉河川風流しあのたろ治
泉河きをたつたりの月毛の舞布施たくして唱つる歌
かさしてい衣をきをしいつこ川ふる雪の夜はあらはれのあわ
本津は渡口京師より北へ行基菩薩泉川を掘り開て供養し修造せり
本津里里の八幡宮武帝
の御宇天都大佛殿建立の時國々より材木を運送し山里に着しこれを本津のあ
あり山所なり京良へ三里半人家多し布施瀑して奉業に
及ちうく施ふるしに山城の泉の里ふるこの川唱たり
和泉式部墓本津町の東にあり橋柱寺本津の内大鳥村のほとりあり泉川の橋断絶の
式部山里なり
後橋柱水屋にあって数百年後流布施多
今は智寺と号に寄に張えの墓あり
頸洗池あり堂の良堤の下にあり
重衡の頸施あるひし所なり

従一位良敬
後嵯峨女
後宇多院
北堂大尼

海修山寺

解脱大慈心大修

牛頭天王

天狗天

みろくの石

佛生寺

上海里

奥院

本堂

大師堂

春日紅松

伊勢の宮

加茂の宮

くるくるの茶

宝瓶院

今圖

相樂里を本津の坪土師の南にあり　古事記に白ゐ鳥の御陵の白を常に悲て山代國相樂郡に至り樹の枝に

万葉　朝旁れかのめりしたくら城のおとの山なまの塔をりをぬれて　高橋朝臣

鹿背山を本津の東にあり　山上に城ありこれ坂本津の城なり　馬咋山　仙覚万葉抄に泉川こゑゝびてふしいりあり今さぐるゑ

後撰　若雄ら小坂の路を行絶て雪降ふるる夜の琴山　公實

一の坂　本津の南半里にあり　念佛石　一の坂の南にあり土人云講座なり南都大佛殿再建のとき是山城大和の石堀を

念佛の功德さらあり　狛里　上狛は本津川を隔て北十町ばかりにあり下狛は山所より軟にして本津川の

西里　西北りに山あり百濟高麗より惠灌惠宗なりて人民の僧侶ありて山里に

ふ行せりと高麗の文字あり狛さうして所の名とせり一説に百濟の狛と一まぎれり偏を拔旁の

拾　若ふきくらはの波の爪ばりとかりかくかりるるらるべ　朝光

やはらぐふるもりくらもりを山城は狛野ふるりをでしたれ　兼慶

泉橋寺　山里の南にあり本尊地藏菩薩は山城は狛野ふるりをでしたれ　上狛の

野中に礎遺れり泉の石藏あり行基の作なり平記に吉津の石藏ともあり　高麗寺は旧蹟　上狛の

勅して唐僧惠辯住しまるり

祇原　狛里の東一里にあり　祇を埋置たりそれ泉の水流入てつくるそれ祇ふるる

新古今　おとうて中に多村あり西村に国綺井を鹿東村登大路佛生寺奥畑等なり

みのはるるそ波るいろこのいろきそそ色しるん　惠捕

ま　とくれたるさくやはなたくのたるまのの渡りも今さるりと　光俊

椿の杜　祇園の郷中西村にあり椿の入口　嘗の瀧　西村の入口にあり　真田川　西村奈良の

後撰　そそそ山岑れあるしれ風をつみふる云れ葉をかさそ集る　貫之

後拾　いのれたあれとはあるふる葉をる椿の杜の落くるるん　源川左大臣

新古今　はつのあはとをふるつるこれ椿のりふあるしはるる　定家

國分寺　旧郷河原村にあり本尊阿弥陀佛聖武帝の御願にして　菜切石　旧郷井平尾村にあり弘法大師

同基の基全くそ日本國毎ふ寺と建て是寺こそ　野草をかれぬるるあり

海條山寺　祇園郷佛生寺村の山上にあり　坂道八町あり又登大路　當寺は聖武天皇の勅

よりもなる道あり

願所にして中興を解脱上人云ふ解脱の上足義山上人も　宗旨真言にして本尊を

十一面観音脇士は地藏毘沙門を安置　三重塔　招提寺の開祖鑑真和尚漢土より渡来

本尊を文殊菩薩なり　文殊堂　本尊を文殊菩薩なり　役行者の縁を安置　新向松　長四丈枝は新向しまひ所なり

奥院　本尊十一面観音解脱上人の作なり左右に解脱上人の像　安置仏上人の像

安置仏の南の窓に月花の窓あり仏所なり毎日仏祠に解脱上人に祈る

解脱上人塔慈恵上人塔　本堂より一町ばかり　西にあり

井手寺　慈仏上人耕作のあり井手寺十六人を撰び早稲の恵祈ぬ真言流今絶ぬ　絶ぬして仏

里に林特しに人あり常に水飯を守る早魃の新なしあれば井手寺と号ス

鹿路山
千手の窟
本堂
天満宮

笠置寺
観音谷
北笠置
天満宮

恭仁の都は旧地八瓶原の西鹿背山の麓なり聖武帝所宇天平十二年十二月橘諸兄公山城の国恭仁郡に遷す

始て官城を造り帝行幸しぬ賀世山の西の道なり

左京より西七条京より一里

新朝 みくらのうつる久迩の都をあれはてし宮人のうらみぬれば　源実朝

新拾 吹風もむすぶとのうも思つるふれる都に袖のなみたは　太神門院

新続古今 泉川のいつより人のたえてくふの都ちあれくるめる　兼氏

流固を瓶原の西加茂の渡れるなり

聖武帝天平十年南都大佛殿建立の時伊賀より材木を組て泉川と流す岩石河中に多て通りがたし

砕散て通り難く故に多くの材木筏に組て安堵と流し其ふるけさ巖るれ〳〵まそ

所と流の固くつゝ又一つの岩

河下に流て今飯固しと

加茂のやしろ河は瓶原より略村に至る道の傍にあり　加茂郷を去る二十丁中に六村あり

略川　泉川の別名なり　清見川原　略の渡に至る川原なり

布當山　瓶原の西なり　一隅山　泉川のほとり

ゆくすえ山ゆまゆくと見れど百代もかはらぬ山の大宮所　清人

古郷を遠くもあるかな人の国に我うらぶれて旅寝せしかな　高岡河内連

鹿路山笠置寺木津川の河上笠置の山下にあり　麓小民家多し川辺に雨村あり

南笠置北笠置と云

五月雨にあふよりまちるつゝみかさをもとりてはしく　後嵯

當山を笠置と號るは往昔天武天皇此山に旅猟し給ひ駿馬巖に勝て屈して動ぜず天皇危急あり

して三寶に礼拝し安泰を願しに

あるべき此山に佛閣を造営すべしと祈誓しぬ既に感應あり忽に速

進む故に其證として着御の菌笠を遺し還幸しぬ遂に佛閣を

建立ありて笠置寺と號しぬ　藤原八町あり　宗貞の墓言葉と新撰

本堂に弥勒佛を本尊とす　自然石に護摩壇を刻む　護摩堂　正月堂と号す春三箇月の間天下安全の修法あり

三月堂あり當山西麓の後に南都東大寺に

旋て三月三日の修法あるなり

弥勒石　天武帝此山に来り天降りて弥勒の像を拝む

高さ二間横四間なり西麓の岡石面に佛像刻る

薬師石　高十間余　文殊石　高五間余　虚空蔵石　高八間　石面に佛像解る

横四間なり

千手崖　良弁僧都の所なり笠置崖　胎内桃　奥の院させるなり身を編く

楠書判石　横正成石面に書判を居なきしるり　護摩壇跡　良弁山所において祈禱ありしと　奥吹岩

護ゞ僧法の母夏の榎本神當山の鐘楼解脱上人冥土より檀浮檀金弘敬
鎮守と
ゝ
銘に曰笠置山般若臺建久七年丙辰八月十五日般若臺浅橋の西にあり解脱
大和尚南無阿弥陀佛上人と云日明神と
敬仰の解脱上人塔八町ばかりなるあり溪谷隔て千手瀧石正堂子瀧金剛
所なり白山のふもと
童子瀧山のうしにあり溪川のうれなり後醍醐帝の皇居を當山の嶺にして本丸二の丸
の跡いまに石垣勒石の上の平地なり楠正成もまづ来りて始て佛味方とゝ陶山
小見山を攻はせ所を山の背にして小の方にあくれば百丈の巌石そびえて
鳥も翔がたく古松枝を垂蒼苔露をあらそふ麓みい泉川と常て白浪巌を砕
く勢ありて水流の委曲舊蛇ふ似なり山列第一の勝地にして千巌秀を競ふ萬
壑流争ふさまを水の委曲とひつゞ
栗栖天神宮笠置山の麓人家の西にあり所に天満天神と見笠置寺の安産祈
飛鳥路笠置の小十余町にあり陶山小見山ふもとより
夜詰せ来ると至て笠置の里と唱へ
有市飛鳥路の北なり二条より
大河原有市の西なり所山城大和
伊賀等の國境なり

武庫川女子大学附属図書館
04464861